岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 66

鳩ヶ岩山古墳

1988.3

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 66

鳩ヶ岩山古墳

1988.3

岡山県教育委員会

序

岡山市の西北部に位置する日応寺，三和地区は標高200～300ｍの比較的ゆるやかな起伏の高原状の地形をなし，吉備高原の南端部にあたります。この地は果樹園芸の盛んな地域で，温室ブドウや桃などの主産地として知られる山間農村地域であります。

このたび，この日応寺の地域に，将来の航空需要の増加やジェット機の就航に対応できる新たな空港が岡山県により建設されることとなりました。この建設計画に対し，岡山県教育委員会では，あらかじめ付近の埋蔵文化財の分布調査を実施し，そのうえで，岡山県土木部と事前の協議を重ね，文化財の保護に努めてまいりました。しかしながら，今回調査をいたしました鳩ケ岩山古墳は標高284ｍの高所に位置していたため，航空関係法に照らし現状保存は困難となり，やむをえず事前の発掘調査を実施することになりました。

発掘調査を行いました当古墳は，古墳時代後半期の横穴式石室を内部主体とする円墳であります。内部の石室のみならず，墳丘部までほぼ完存した良好な古墳であったため，発掘調査によって石室の構築過程はもとより，墳丘部列石等のあり方に至るまで数々の新知見が得られました。

調査にあたりましては，現地の作業に従事して頂きました地元有志の方々をはじめ地元関係者の方々，岡山県土木部新空港建設室ならびに同新岡山空港建設事務所から御援助と御協力をいただくとともに，県文化財専門委員の先生方からも御指導・御助言をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

なお，地元関係者の熱意と，岡山県土木部の御協力によって，当古墳と同様な理由により事前調査の対象となった龍王塚古墳の２基の古墳が近隣の一角に移築復元されたことを付記して，感謝の微意を表します。

この報告書が，移築復元された古墳とともに広く活用され，文化財の保護に役立つことができれば望外の幸です。

昭和63年３月

岡山県教育委員会・

教育長　宮　地　暢　夫

例　　言

1．本書は，岡山県教育委員会が岡山県土木部の委託を受けて，新岡山空港建設に伴い発掘調査を実施した，岡山県岡山市三和(みと)479番地ほかに所在する鳩ケ岩山古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，昭和61年８月１日～11月29日の約４ケ月間実施した。

なお，古墳に隣接する祭祀遺跡推定地についても，並行して調査を実施した。

3．発掘調査は，岡山県古代吉備文化財センター職員山磨康平が担当し，地元有志の方々の協力を受け実施した。

4．発掘調査にあたっては，岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌氏，近藤義郎氏，水内昌康氏の御指導・御助言を得た。

5．本書の作成は，山磨が担当し，昭和63年１月から３月に実施した。作成にあたっては，文化財センター職員諸氏の多大の御協力を受けた。なお，第一章第一節，調査の経緯の項は，同センター職員河本清が行った。

6．挿図中の高度値は，すべて海抜高であり，方位は真北である。

7．第４図は，建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図「総社市東部」「東山内」を複製したものである。

8．出土遺物，実測図，写真等は，岡山市西花尻1325－３，岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過……1
　第１節　調 査 の 経 緯……1
　第２節　調 査 の 経 過……2
第２章　遺 跡 の 環 境……5
第３章　調 査 の 結 果……9
　第１節　立地と調査前の状況……9
　第２節　墳丘と外部施設……12
　第３節　横 穴 式 石 室……19
　第４節　遺物の出土状況……21
　第５節　出　土　遺　物……24
第４章　ま　と　め……33

挿 図 目 次

第１図　新岡山空港平面図・縦断図（Ｓ＝1/30000）……1
第２図　開港した新岡山空港……4
第３図　遺跡位置図……5
第４図　鳩ケ岩山古墳周辺遺跡分布図（1/25000）……6
第５図　古墳周辺の地形図（Ｓ＝1/5000）……8
第６図　古墳位置図（Ｓ＝1/400）……9
第７図　地形測量図（Ｓ＝1/200）……10
第８図　墳丘測量図（Ｓ＝1/150）……11
第９図　墳丘上列石平面図・立面図（Ｓ＝1/50）……13
第10図　石室前面列石・閉塞石平面図・立面図（Ｓ＝1/50）……14
第11図　横穴式石室実測図（Ｓ＝1/50）……15
第12図　墳丘・周溝土層断面図（Ｓ＝1/50）……17
第13図　石室平面図（Ｓ＝1/50）……20
第14図　石室内遺物出土状態（Ｓ＝1/40）……21
第15図　石室内出土遺物接合関係図（Ｓ＝1/60）……22
第16図　出土遺物(1)（Ｓ＝1/3）……23
第17図　出土遺物(2)（Ｓ＝1/3）……24
第18図　出土遺物(3)（Ｓ＝1/2）……26
第19図　出土遺物(4)（Ｓ＝1/2）……27
第20図　出土遺物(5)（Ｓ＝1/2）……28
第21図　出土遺物(6)（Ｓ＝1/2）……29
第22図　出土遺物(7)（Ｓ＝1/2）……30
第23図　出土遺物(8)（Ｓ＝1/3）……31

表　目　次

第１表　耳環計測表……30
第２表　臼玉計測表……30
第３表　土器観察表……32
第４表　古墳比較表……34

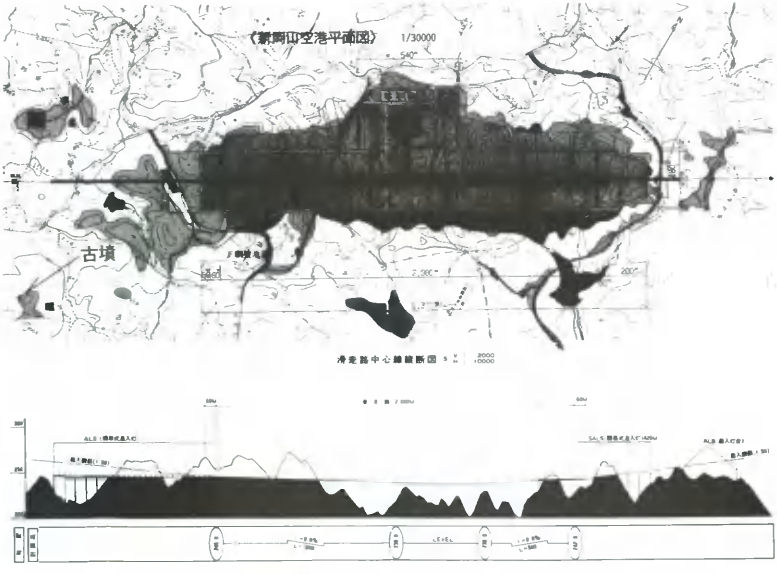
図　版　目　次

図版１　周辺航空写真
図版２－１　古墳遠望（南方上空から）
２　古墳全景（西方上空から）
図版３－１　古墳遠景（西から）
２　調査前の状況石室入口（南西から）
図版４－１　調査前の状況（東から）
２　墳丘表土除去後（東から）
図版５－１　墳丘全景（南西から）
２　墳丘全景（東から）
図版６－１　石室入口表土除去後（南西から）
２　石室入口閉塞状況（南西から）
３　石室入口閉塞石除去後（南西から）
図版７－１　墳丘列石（東から）
２　墳丘列石・周溝（北東から）
図版８－１　墳丘東側周溝（南から）
２　墳丘西側周溝（北東から）
図版９－１　周溝ＡＰライン断面（北東から）
２　周溝ＢＰライン断面（南西から）
３　周溝ＥＦライン断面（北から）
図版10－１　石室玄室部（南西から）
２　石室羨道部（北東から）
図版11－１　石室玄室羨道間天井石（北東から）
２　石室玄室部東側壁（南西から）
図版12－１　石室羨道部西側壁（北東から）
２　石室羨道部東側壁（北西から）
図版13－１　石室内埋土状況（北東から）
２　玄室部床面（南西から）
図版14－１　玄室西奥遺物出土状況（南から）
２　玄室奥遺物出土状況（南西から）
３　玄室東奥遺物出土状況（南西から）
図版15－１　墳丘盛土状況（北東から）
２　墳丘盛土状況（北西から）
図版16－１　石室盛土除去後（北東から）
２　石室盛土除去後（北西から）
図版17－１　石室盛土除去後（北東から）
２　石室盛土除去後（東から）
図版18－１　墳丘表土除去作業状況（東から）
２　墳丘盛土除去作業状況（西から）
３　盛土除去石室清掃作業状況（北東から）
図版19　出土須恵器
図版20　出土須恵器・古代末～中世土器
図版21　出土鉄器(1)
図版22　出土鉄器(2)
図版23　出土遺物
図版24－１　鳩ケ岩山古墳移築復元状況（南西から）
２　龍王塚古墳移築復元状況（南から）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調 査 の 経 緯

新岡山空港建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いは，計画策定の段階での分布調査に始まったが，滑走路を中心とした日応寺地区では遺跡を確認するにはいたらなかった。しかし，その後，航空安全確保のための航空保安無線施設の建設が計画され，ここでは古墳（龍王塚古墳）１基と巨石が密集する磐座が推定された。このため昭和58年８月から同年11月にかけて岡山県教育委員会（岡山県教育庁文化課）が発掘調査を実施し，既に報告書を刊行しているところである。ところが，昭和61年３月になって急拠，鳩ケ岩山古墳の発掘調査が建設担当課から要請された。即ち，航空法第49条３項に基づく法的規制として，新空港の滑走路を標点とした水平表面の障害物件を除去しなければならないということから，問題となったのである。つまり岡山新空港の完成滑走路の標点の高さは239ｍとなっている。この標点の垂直上に45ｍを加えた数値を超えるもののうち，3000ｍ以内は航空機の離着時に障害となるため，これら障害物件等は全て除



第１図　新岡山空港平面図・縦断図　S＝1/30000　新岡山空港整備計画概要から

去しなければならないということである。鳩ケ岩山古墳の所在する位置は，空港ターミナルから約２km，滑走路の西端からは約１km強である。最高所の墳丘頂部は，調査後の測量図でみても285.9mである。したがって調査前の段階においておよそ１m強が問題となり種々論議されたところであるが，この法的規制は非常に厳しく，古墳の調査を実施する以外にないということとなったのである。また磐座については古墳の調査後は一帯を整備するため古墳とともに調査することとなった。

第２節　調 査 の 経 過

当古墳は，標高284m前後の高所に位置し，器材の搬入路が無く，下方の県道から山道を運搬する必要が生じた。このため調査前の条件整備の一環として，空港建設事務所に対し，７月下旬からの古墳周辺の樹木の伐採や，搬入路の整備とともに，８月１日から器材の搬入の作業をお願いした。これらの諸条件整備が整った８月上旬にグリッド杭の設置を行い，地形測量を実施した。地形測量の終了後，８月18日から，地元関係者の協力を受けて，先ず，墳丘部の表土除去から発掘作業を開始した。古墳周辺部の表土除去に続き，隣接する磐座と想定される露岩周辺の表土除去を行い，これらの作業が終了した10月９日に古墳，及び周辺部の航空測量を実施した。この間，石室内の埋土の掘り下げ，遺物の検出，図面作成等を並行して行った。その後，周溝部の掘り下げと墳丘列石等の検出を続けながら，石室内，墳丘，周溝部の図面作成，写真撮影を順次行い，11月中旬ごろから墳丘部の解体作業に入った。この間に，石室内埋土のふるいによる選別作業と水洗いを行った結果，埋土中から臼玉等の検出を行った。11月下旬から徐々に器材の徴収作業を行いながら，石室上面の図面作成，写真撮影を行い，11月29日をもって全ての作業を終了した。なお，露岩周辺には祭祀の跡等は，認められなかった。

調　査　体　制

専門委員

鎌木義昌（岡山理科大学教授，岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授，岡山県文化財保護審議会委員）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　橋本泰夫

総務課長　　佐々木清

調査課長　　河本　清

文化財保護主査　山磨康平（調査担当）

発掘調査参加者

有森万久，遠藤節子，大森市子，斉藤不二恵，斉藤文子，重実寿美，関　義夫，戸田花子，戸田良恵，西山佐智子，二宮清子，二宮繁男，信朝国夫，信朝澄子，信朝　正，福明叔子，福明政子，横田重子，横田静香

発掘調査の実施に際しては，新岡山空港建設事務所，香河克政氏に連絡調整等諸事お世話になった。さらに，馬屋上学区連合町内会長横田文太郎氏にも種々便宜を計って頂いた。記して謝意を表します。

報告書の作成，遺物整理は，一部現地での作業後，文化財センターにて，主に，有森万久（遺物復元），植岡美矢（遺物実測トレース），坪田由利恵（遺構トレース），政田孝（遺物写真）の各氏が行い，文化財センター職員の協力をえた。

日　誌　抄

昭和61年８月１日（金）　器材搬入開始
８月８日（金）　調査準備，テント設営，器材搬入
８月13日（火）～17日（日）　地形測量開始，レベル設定
８月16日（土）～17日（日）　地形測量
８月18日（月）　作業開始，墳丘調査前写真撮影
８月23日（土）　調査区設定
８月25日（月）　石室入口付近表土除去
８月26日（火）　石室内掘り下げ開始，石室入口写真撮影
８月29日（金）　石室内埋土上層掘り下げ
９月１日（月）　石室内掘り下げ，表土除去
９月８日（月）　石室内清掃，写真撮影，土層断面レベル設定
９月９日（火）　石室内土層断面実測，表土除去
９月13日（土）　石室内実測作業，石室内一部掘り下げ
９月22日（月）　玄室遺物取り上げ，羨道部掘り下げ
９月24日（水）　表土除去，磐座周辺掘り下げ，石室内写真撮影
９月26日（金）　石室内遺物取り上げ，表土除去
９月30日（火）　墳丘清掃，羨道部掘り下げ
10月２日（木）　石室内写真撮影，石室内遺物取り上げ，墳丘清掃
10月４日（土）　墳丘清掃，全景写真撮影
10月６日（月）　周溝断面実測，土層断面畦除去，周辺清掃

10月 7 日（火）　墳丘畦除去

10月 9 日（木）　航空測量

10月13日（月）　周溝トレンチ設定，掘り下げ

10月16日（木）　周溝掘り下げ，周辺トレンチ

10月18日（土）　周溝土層断面実測

10月21日（火）　周溝掘り下げ，石室実測開始

10月24日（金）　周溝平板実測，周溝掘り下げ

10月27日（月）　周溝掘り下げ

11月 1 日（土）　周溝地形測量，石室実測

11月 5 日（水）　墳丘清掃写真撮影，平板実測

11月 7 日（金）　墳丘列石平面・側面図実測

11月12日（水）　周溝畦除去，清掃写真撮影，石室側壁実測

11月14日（金）　墳丘盛土除去，奥壁実測

11月18日（火）　墳丘盛土除去，側壁実測補足，墳丘土層断面

11月19日（水）　側壁実測補足，石室入口写真撮影，墳丘盛土除去

11月21日（金）　墳丘掘り下げ，器材搬出

11月27日（木）　天井石平面図，遠景写真撮影，器材搬出

11月29日（土）　実測補足，調査終了

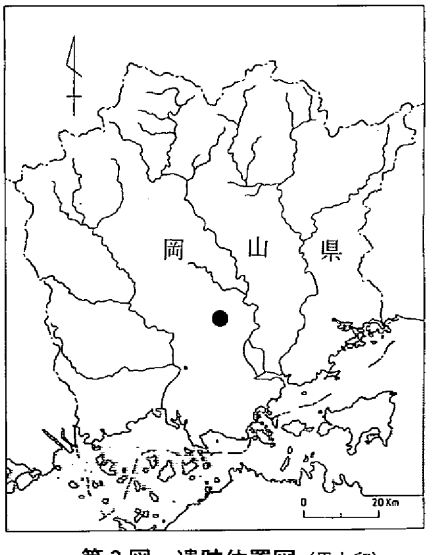
第２図　開港した新岡山空港

第2章　遺跡の環境

鳩ケ岩山古墳は，岡山市三和479番地他に所在する。当地域は岡山市の北西部に位置し，古代の備前国津高郡内に含まれ，備中国との国境近くに位置している。大字三和は，廃藩置県後の統廃合により御津郡に属し，1889年，三和，田原，富吉，日応寺の4村が合併し，馬屋上村と称し，その後，野谷，横井村を合併し，町制をしき津高町となり，1971年岡山市に編入され，現在に至っている(註1)。

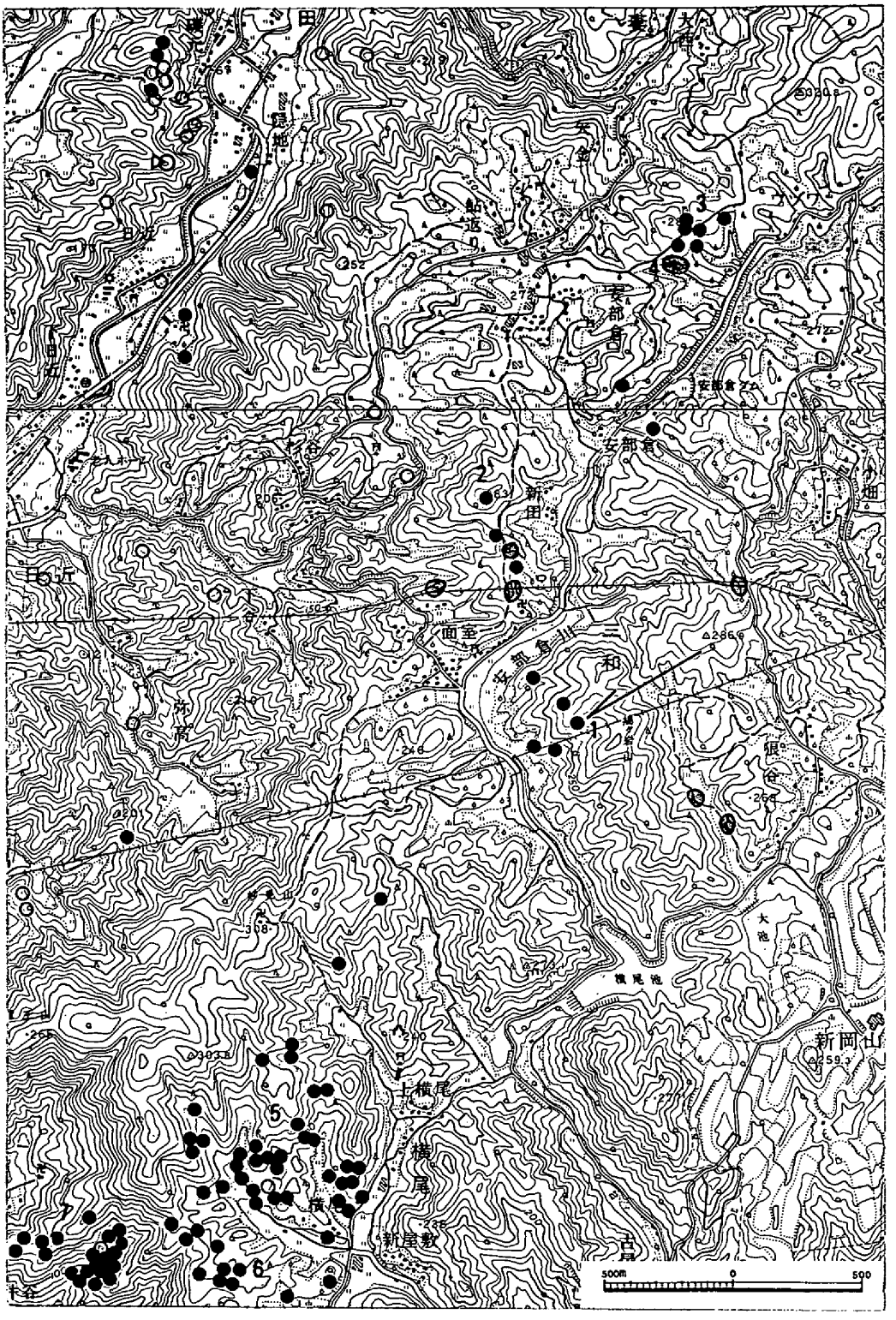
遺跡の位置する三和，日応寺の地域は，標高200～300mを測る比較的ゆるやかな起伏の高原状の地形を呈し，吉備高原の最南端にあたる。日応寺に源を発し，南西に三和地域を貫流する安倍倉川は，長野付近で砂川と呼称し，野殿付近で笹ケ瀬川に同流し，児島湾に流入する。安倍倉川流域には，河川にそって狭少な谷水田が形成され，水源付近の日応寺や，大字三和の安倍倉，面室に集落を形成している。なお，面室の全集落は，新空港の建設に伴って500m程下流に集団移転がなされた。また，この地域は，戦前から温室ぶどうや桃の果樹園芸の盛んな地域で，県下の主生産地の一翼を担っている。

今回報告を行う鳩ケ岩山古墳は，鳩ケ岩山の山頂から北西方向に派生した標高284m付近の尾根上に位置する。当地域は，県南部に位置している割には，南部沖積地や西部足守川流域とやや距離をおき，山間で可耕地も少なく，遺跡も粗な地域である。ただ，昭和5年に刊行された岡山県通史(註2)には，馬屋上村所在の古墳として，昭和58年に空港建設に伴い事前調査を行った龍王塚古墳（大字杉谷分）の記載が見られ，古くから周知された古墳も存在する(註3)。昭和58年に刊行された岡山市遺跡地図によると，日応寺，三和の地域には，旧石器，縄文時代の遺跡は現在のところ発見されていない。弥生時代の遺跡も希薄であるが，龍王塚古墳の調査時に弥生土器の小片や石庖丁、石鏃が出土している。さらに同古墳の所在する同一尾根上の2ケ所に弥生土器の散布地が記載されている。また鳩ケ岩山の東側山麓の狭少な谷水田の形成された場所にも2ケ所散布地が知られ，一部には，竪穴住居を想定させる炭，焼土の広がりも確認されている。



第3図　遺跡位置図（黒丸印）

この様に，龍王塚古墳周辺の弥生土器，石庖丁，石鏃の出土や，鳩ケ岩山東山麓の炭，焼土等の広が



第４図　鳩ケ岩山古墳周辺遺跡分布図　（S＝1/25000）

りは，小規模な山間集落跡の存在を充分想起させるもので，さらに詳細な踏査を行えば，かなりの数の集落跡の発見も予想される。

古墳時代の遺跡は，当地域で，最も密度が高くなる。その状況は，主に後半期の横穴式石室墳が点在するものと，前述の弥生土器の散布地に重複して須恵器，土師器が確認され，弥生期から継続した集落跡が想定されるものとである。このうち，鳩ケ岩山の丘陵には，いずれも横穴式石室を内部主体とする古墳が，鳩ケ岩山古墳を含め6基確認されている。西側山麓に位置する2基は，いずれも小規模なもので，径10m，石室幅1～1.1m，石室残存長5.3mを測るものと，径7m前後の横穴式石室を内部主体とするものである。先年調査を行った龍王塚古墳の付近には，3基の横穴式石室墳が確認されており，龍王塚古墳と他の一基が片袖式の横穴式石室を有し，やや規模が大きい。安部倉の西丘陵には，6基の横穴式石室が密集する塚原古墳群が知られている。いずれも，小規模で玄室幅1m前後，径10～12m程である。また，安部倉ダム堰堤西には，横穴式石室に先行するとみられる箱式石棺を内部主体とする小規模墳が確認されている。

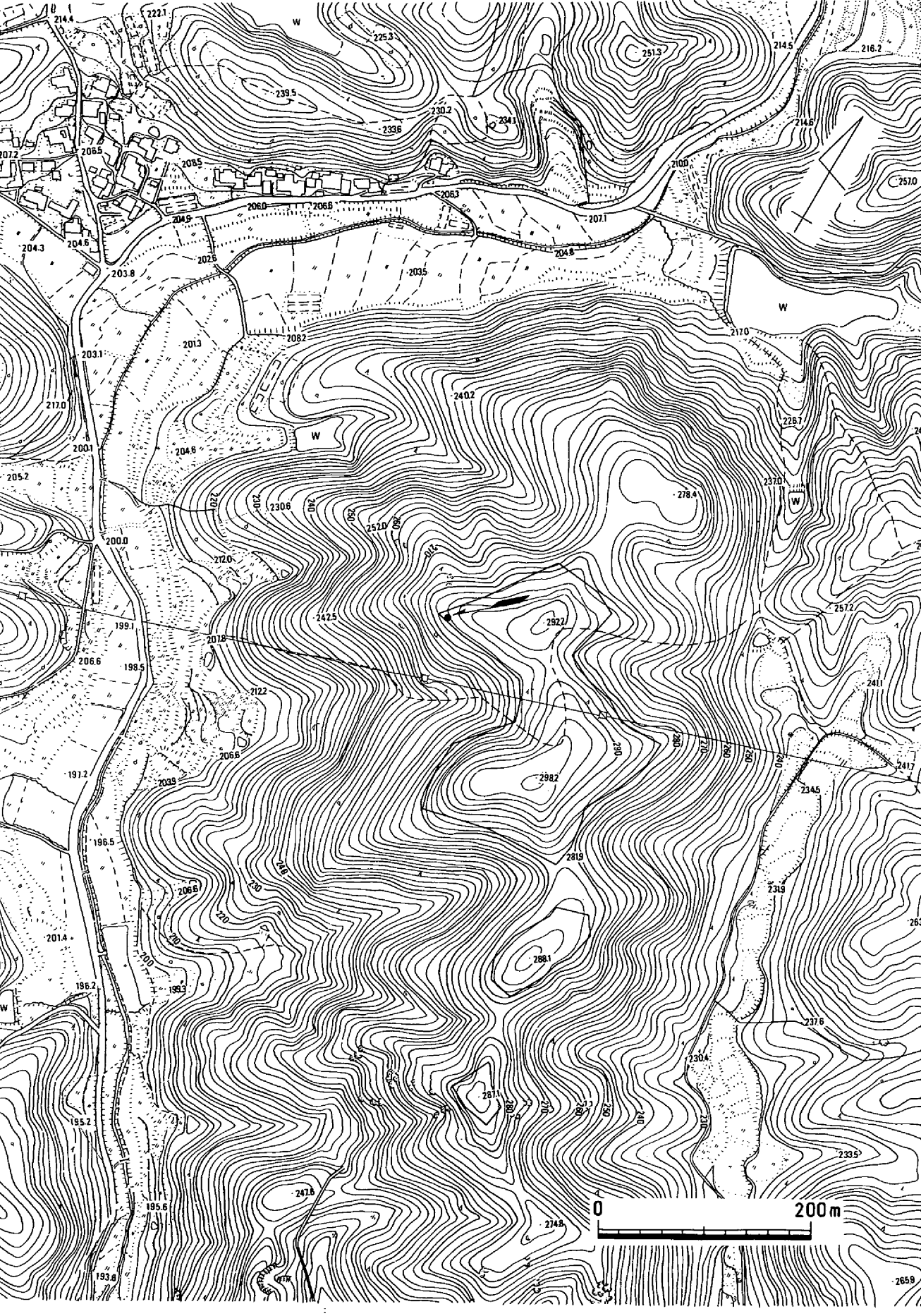
なお，当地域からやや離れる旧備中国に属する足守川中流域の下足守，三井寺の谷には，大規模な後半期の古墳群が形成されている。このうち一基に家形石棺も安置されており，足守川流域の奥津域の感を呈している。この地区の古墳分布は，国境を越えて備前国側の横尾にも展開しており約50基の後期古墳群が形成されている。

歴史時代の遺跡についてはほとんど知られていない。わずかに今回調査を行った鳩ケ岩山古墳や龍王塚古墳から平安末期と鎌倉期の土器片が出土しているにすぎない。この他，各所の丘陵頂部には祭祀と推定される露岩が認められる。また，横尾には，戦国時代の横尾城が知られている。なお，時期は不明だが，塚原古墳群の近くに製鉄跡が知られ焼土，鉄滓が散布している。

以上の様に，吉備南部地域としては比較的遺跡の粗な吉備高原最南端の標高200～300mのこの地域にわずかながらも弥生時代以後の遺跡が認められ，古墳時代後半期以後に至り，各所に横穴式石室墳が築造されるようになる。可耕地の少ない山間部に形成された古墳の性格の一担を現わすものとして，龍王塚古墳から県南部の古墳にはめずらしく，石室内から鉄滓の出土が知られている。鉄滓出土の古墳の存在は当地域の遺跡のありかたや，古墳の形成に有効な判断材料となるであろう。

註

（註1）　岡山県『岡山県市町村合併誌』総編　1960
（註2）　永山卯三郎『岡山県通史』上編　岡山県通史刊行会　1930
（註3）　福田正継『龍王塚古墳』岡山県教育委員会　1984
1．鳩ケ岩山古墳　2．龍王塚古墳　3．塚原古墳群　4．塚原製鉄跡　5．横尾古墳群　6．長坂古墳群　7．湯舟谷古墳群



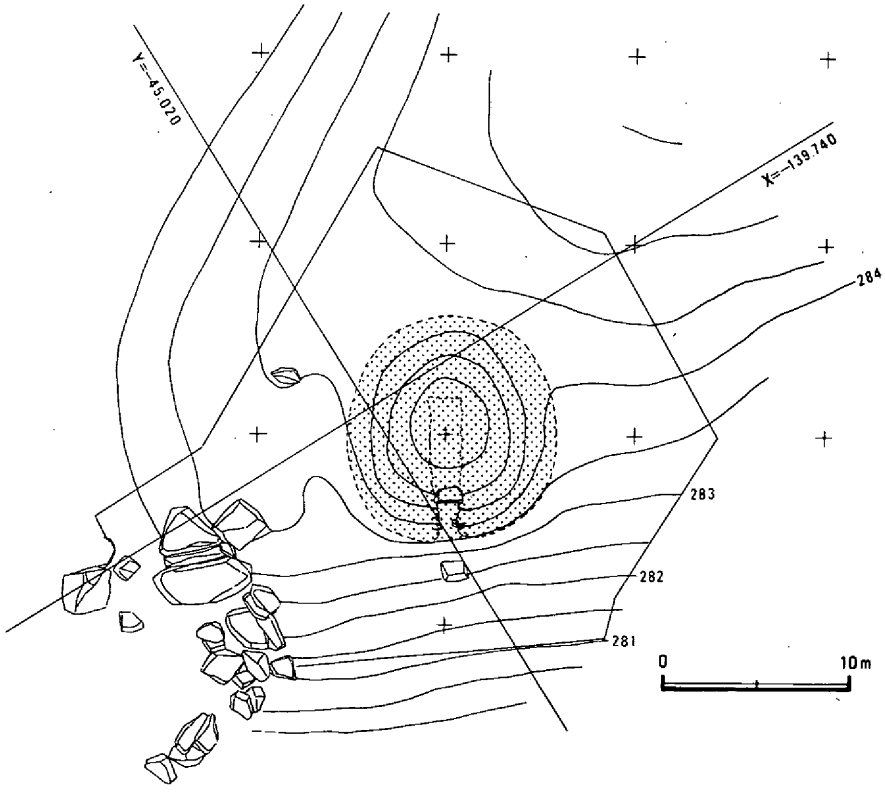
第５図　古墳周辺の地形図　（S＝1/5000）

第3章　調査の結果

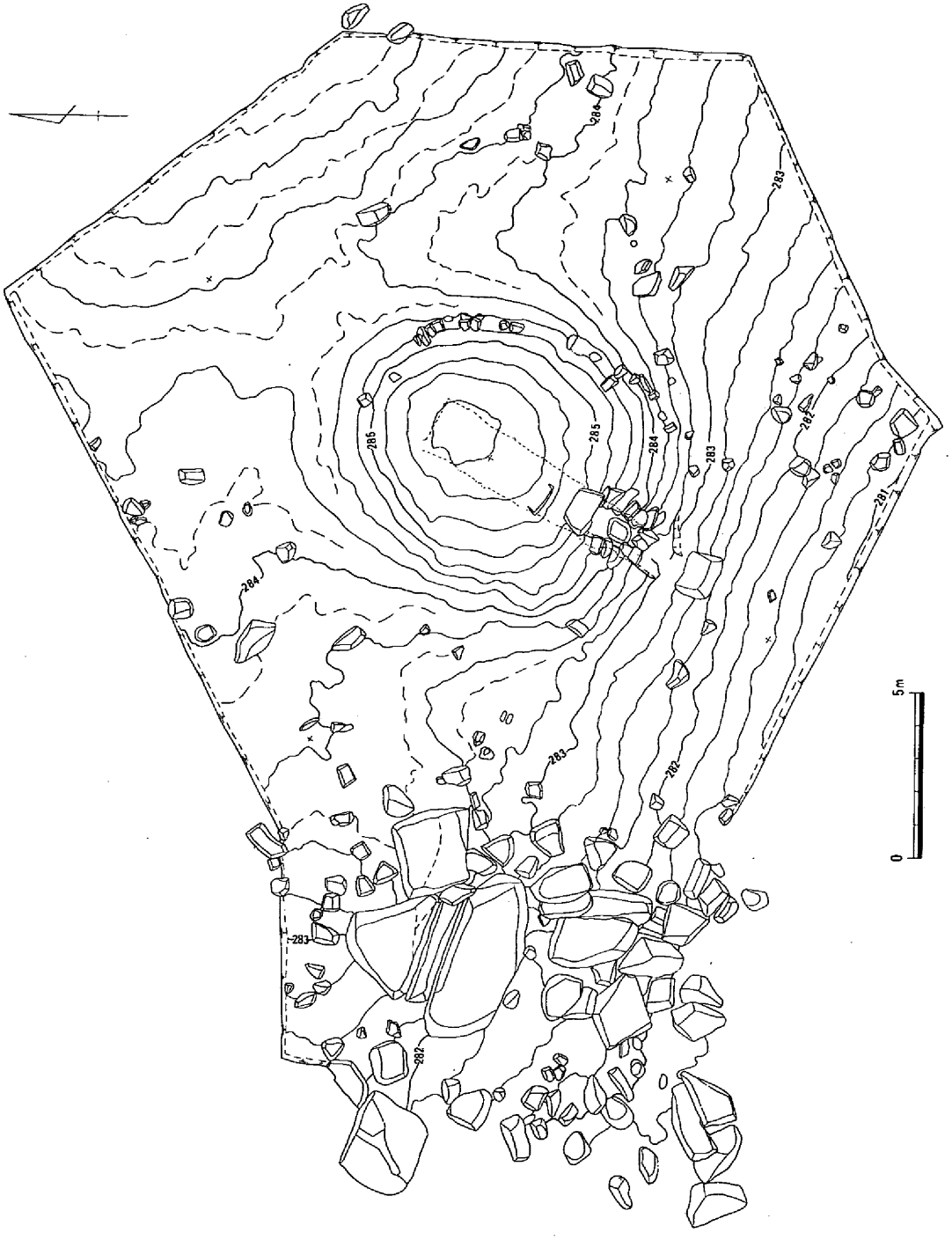
第1節　立地と調査前の状況

当古墳は，標高298mを測る鳩ケ岩山の尾根筋から東方向に派生した標高284m付近の小尾根上に位置する。鳩ケ岩山山塊の北側には，比高差90m程を測る狭小な谷水田が形成され，この間を流れる安部倉川は，下流の野殿付近で，笹瀬川と合流する。また，この谷部をぬうように走る県道妹尾御津線は，空港への主要道の一つとして現在拡幅整備が行われている。

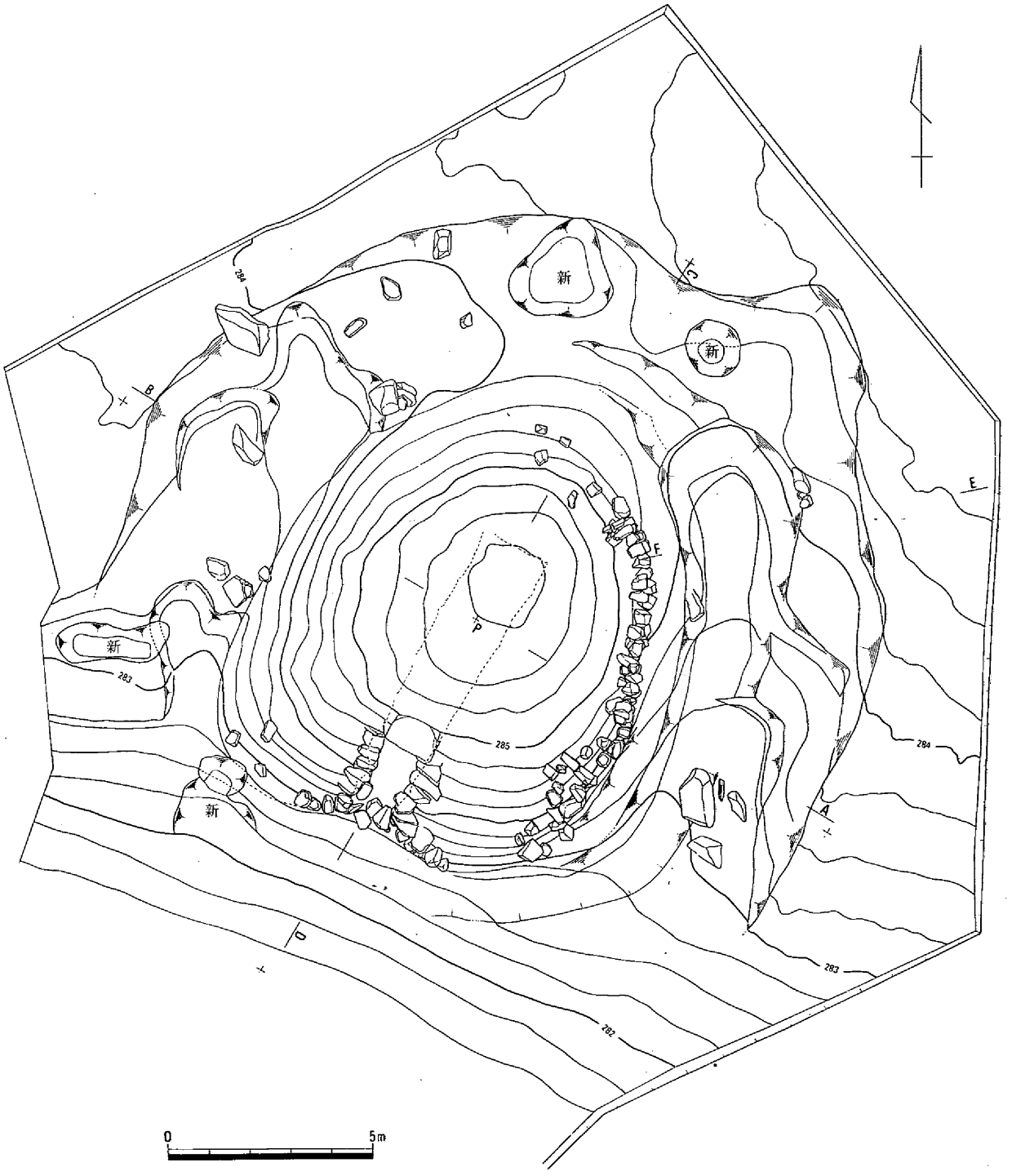
古墳からの眺望は，北から南西方向にひらけており，北方に市内最高所の真星，間倉の集落や，西方に総社市鬼城山が一望のうちにある。周辺の遺跡は，岡山市遺跡地図によると，当古墳のやや下方に横穴式石室の古墳一基が記載され，北西の山麓にも2ケ所にいずれも横穴式石室が位置する。



第6図　古墳位置図　(S＝1/400)



第７図　地形測量図　（S＝1/200）



第8図　墳丘測量図　(S＝1/150)

古墳の調査前の状況は，赤松や雑木に覆われており，案内人無しでは，古墳位置の確認もおぼつかなく，近くに来て樹間を通してやっと墳丘が見通せる状況であった。松喰虫の被害により山の様子が一変しているが，一昔前までは，松茸の産地であったと聞く。

樹木伐採後の状況は，こんもりした墳丘が完存し，周囲がわずかに窪んだ状況から周溝が巡っていることが察知された。また，古墳の北東に接して大形の露岩が尾根から南西の斜面に広がっていた。これらの露岩は，磐座の可能性が考えられ，調査の対象としたものである。

古墳は，南西方向に横穴式石室が開口していた。開口部の天井石一枚が露出し，石室前面にやや大形の天井石らしき石が転落していた。天井石を欠いた石室入口付近は，両側壁の上面が露出し，石室入口付近が土砂で塞がれ，大人がやっともぐり込める程度の空間がある状況であった。ただ石室内は，埋土が少なく立って歩ける程度であった。

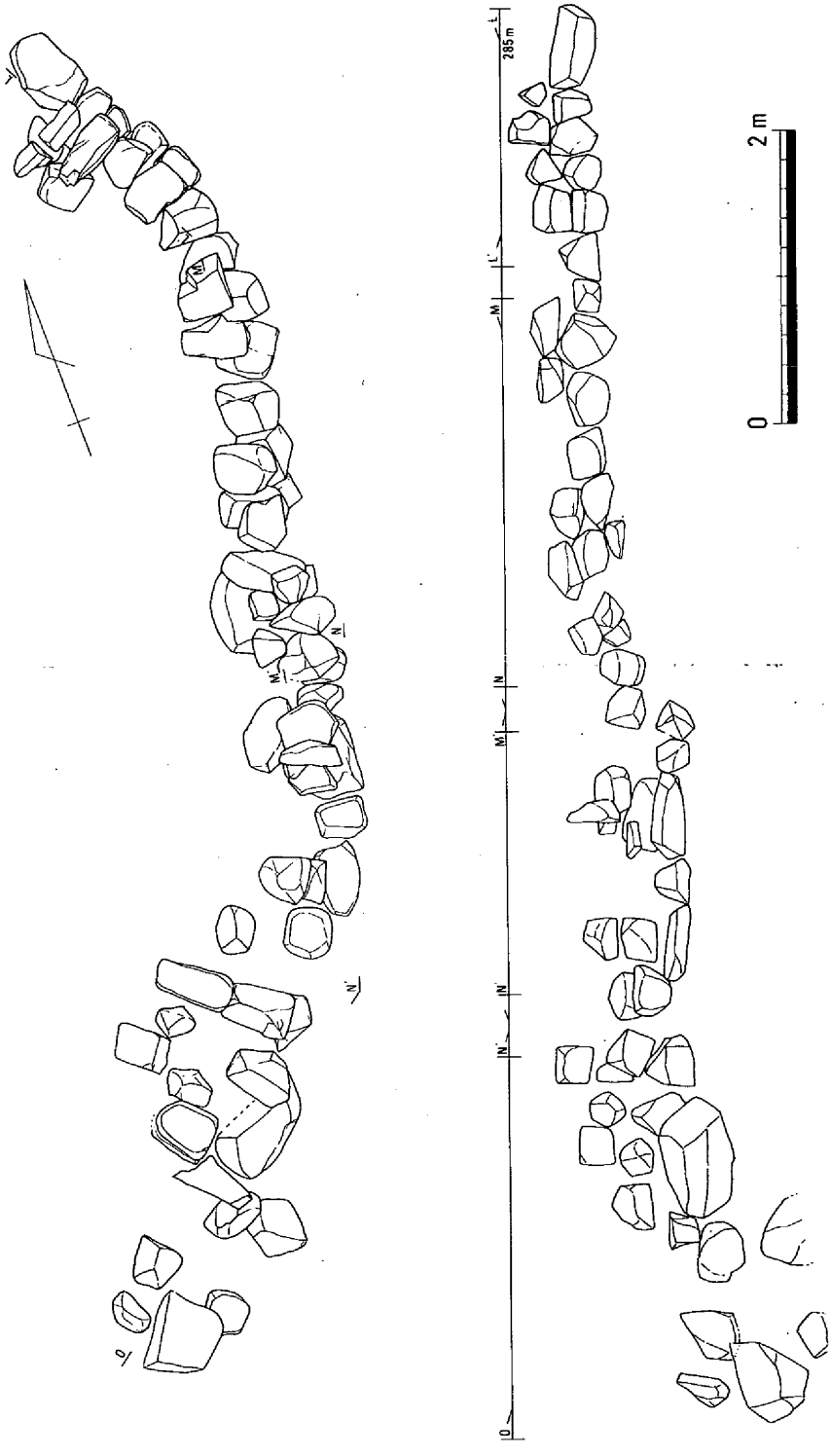
第2節　墳丘と外部施設

墳丘　発掘調査の結果，墳丘は南西方向に派生した尾根の陵線から，若干南東側に下った緩斜面に，石室軸を尾根陵線に対して45度程度の角度を有して構築している。墳丘の規模は，石室の長軸方向で12.5m，直交方向で11.0mを測り，ハート形の平面形を呈す円墳と判明した。高さは，石室入口付近3.0m，北西周溝部で1.8m，南東周溝付近で2.75m，南西周溝付近で2.4mを測り，尾根側に馬蹄形の周溝を掘削している。墳丘東半の裾部には，数段に積上げた列石を巡らし，さらに石室入口には，両側壁から連続して西側に八字形に開く，列石を構築している。

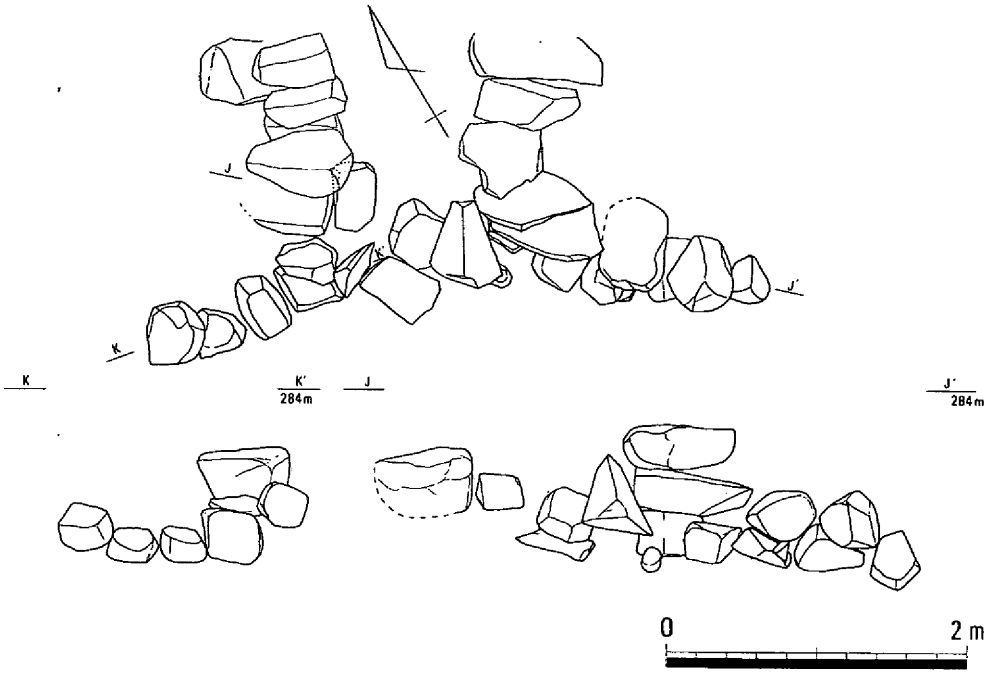
奥壁周辺部の墳丘構築は，石室長軸方向の断面観察や盛土除去後の状況から，この付近には旧表土にあたる黒色腐植土は確認されず，構築にあたっては若干旧地形を削平し，整地を行っている様である。石室掘方内の埋土と奥壁根石上端付近までの盛土は，ほぼ水平の堆積を行っている。奥壁上端から天井石上面にかけては，墳丘中央に盛り上げる様な堆積を示している。

墳丘中央の石室長軸に直交する断面観察では，掘り方両側に黒色旧表土が観察され，この付近では旧地表上に盛り土が行われている。石室掘り方内の埋土は，肩部から石室に向って下降する堆積を示し，掘り方上端付近では水平に近い埋土を行っている。墳丘盛土は，石室周辺部で非常に細かく分層の可能な幾層もの盛土を行い，叩きしめて，墳丘の核に近い状況を造っている。さらにその上に天井石を覆う盛土を行い，墳丘を整えている様である。ただ東側の盛土は，列石を墳丘裾部に順次構築しつつ天井石を覆う作業を行っている様で，東側の盛土とは様子が若干異っている。

列石　石室長軸方向から東側の墳丘裾部を取り巻く様に人頭大の花崗岩を小口積にした列石を検出した。西半部については，墳丘に石材がほとんど検出されず，周溝中に転落した様子



第9図　墳丘上列石平面図・立面図　（S＝1/50）



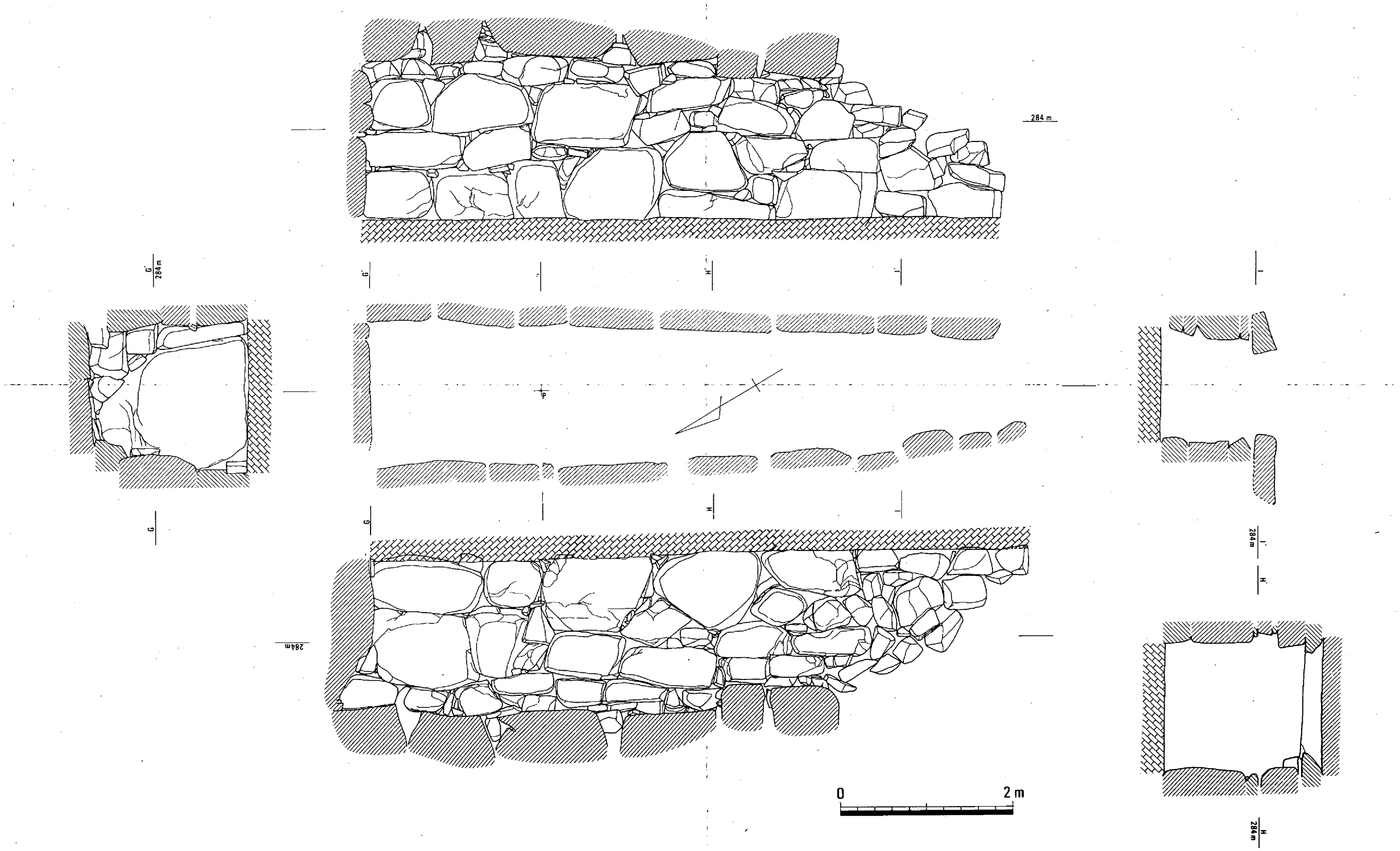
第10図　石室前面列石・閉塞石平面図・立面図　（S＝1/50）

も見受けられないことから元々列石は構築していなかったとみられる。

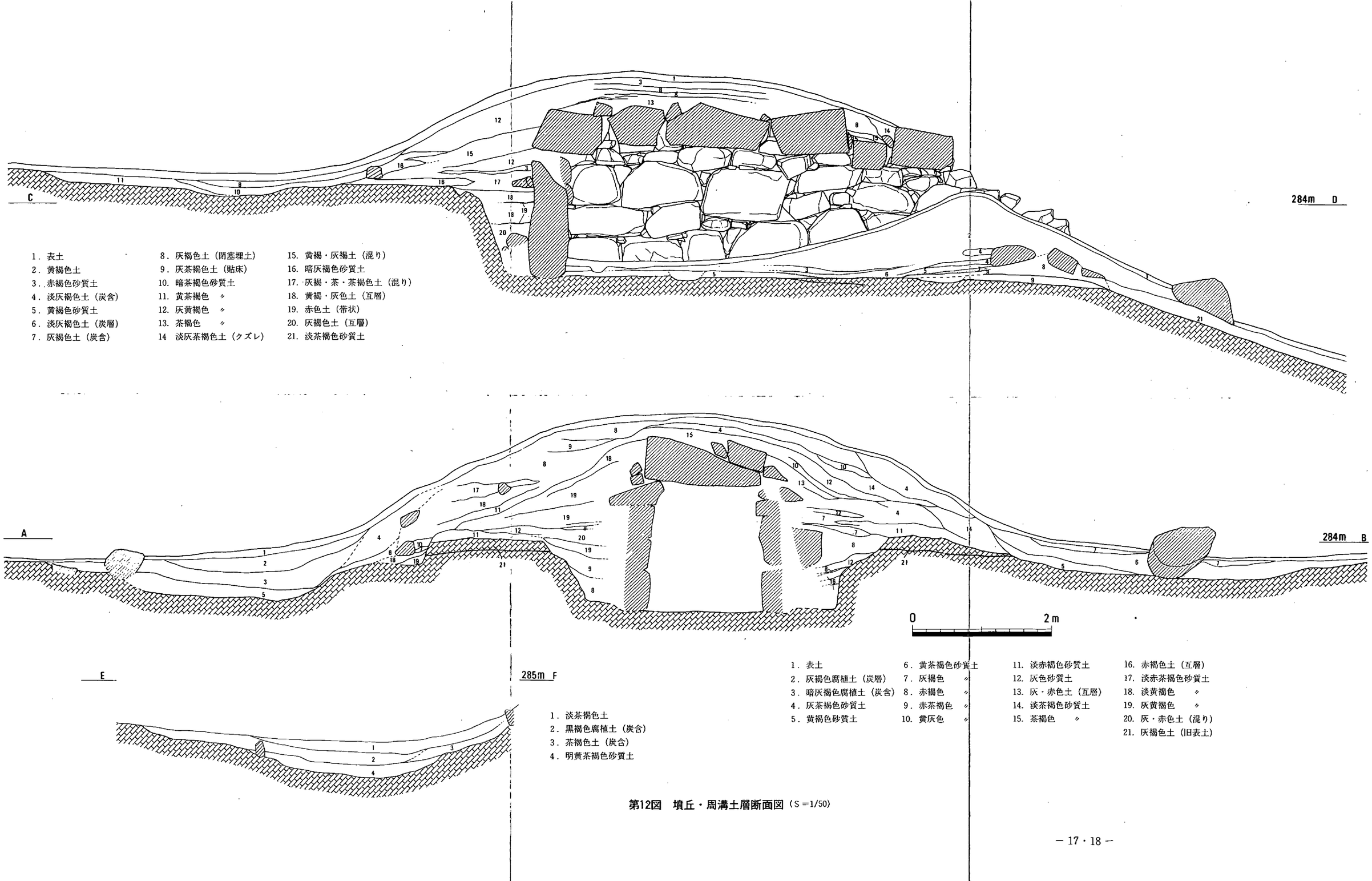
また，石室入口には，両側壁の羨道部端から両側に八字形に広がる列石を構築している。入口から東側に広がる列石と，墳丘部に巡る列石が途切れた付近には墳丘部からの転石がかなり認められたことから，構築時には連続していた可能性も考えられる。

墳丘部列石は，現存長10.0ｍを測り，全体としてゆるく墳丘のカーブにそって弯曲している。ただ詳細に観察すると，第９図（LL′, MN′, N′O）の各々の間を直線的に構築しており，多角形状に配列している。列石の積上げは，多い所で３段，平均２段程度の高さが残存している。上部の消失を考慮しても，多くて３段程度の積上げであったと推察される。列石基底部は，ほぼ地山面に設置しているため，北から南方向に徐々に地形の傾斜にそって下降している。

周溝　尾根陵線から若干南東に下った緩斜面に築造されているため，石室前面を除く尾根側に幅４ｍ程で馬蹄形に巡っている。周溝掘削は石室長軸方向の北から北東付近で深さ30cm程と最も浅く，この付近から墳丘の両側に徐々にレベルを下降させながら掘削されている。墳丘両側を巡る周溝のうち石室に直交方向のＰＢライン付近で，周溝埋土40cmを測り，北端から60cm低下し，南西隅の周溝の消失する付近で1.3ｍ低下している。一方，東側を巡る溝は，墳丘裾部に列石を伴う付近から一段深く掘削され，ＦＥラインで埋土が50cmを測り，北端から50cm低下している。ＰＡライン付近では埋土が90cmを測り，1.0ｍ低下し，溝幅が狭まる南東コー



第11図　横穴式石室実測図　（S＝1/50）



1．表土
2．黄褐色土
3．赤褐色砂質土
4．淡灰褐色土（炭含）
5．黄褐色砂質土
6．淡灰褐色土（炭層）
7．灰褐色土（炭含）
8．灰褐色土（閉塞埋土）
9．灰茶褐色土（貼床）
10．暗茶褐色砂質土
11．黄茶褐色　〃
12．灰黄褐色　〃
13．茶褐色　〃
14　淡灰茶褐色土（クズレ）
15．黄褐・灰褐土（混り）
16．暗灰褐色砂質土
17．灰褐・茶・茶褐色土（混り）
18．黄褐・灰色土（互層）
19．赤色土（帯状）
20．灰褐色土（互層）
21．淡茶褐色砂質土

1．淡茶褐色土
2．黒褐色腐植土（炭含）
3．茶褐色土（炭含）
4．明黄茶褐色砂質土

1．表土
2．灰褐色腐植土（炭層）
3．暗灰褐色腐植土（炭含）
4．灰茶褐色砂質土
5．黄褐色砂質土
6．黄茶褐色砂質土
7．灰褐色　〃
8．赤褐色　〃
9．赤茶褐色　〃
10．黄灰色　〃
11．淡赤褐色砂質土
12．灰色砂質土
13．灰・赤色土（互層）
14．淡茶褐色砂質土
15．茶褐色　〃
16．赤褐色土（互層）
17．淡赤茶褐色砂質土
18．淡黄褐色　〃
19．灰黄褐色　〃
20．灰・赤色土（混り）
21．灰褐色土（旧表土）

第12図　墳丘・周溝土層断面図（S＝1/50）

ナー付近で1.4m低下している。東側を巡る周溝は，石室前面に近い南東コーナー付近にもわずかに周溝と判断できる幅40～50cm程度の浅いくぼみが確認された。

第3節　横穴式石室

本古墳の内部構造は，横穴式石室である。前節で述べた如く，調査前の状況は，石室入口付近の天井石を欠くものの6枚の天井石が残り，墳丘も入口を除きほぼ完存していた。石室入口付近は，両側壁上面がわずかに露出しているのみで，石室内には墳丘盛土が崩壊し二次的に天井近くまで堆積していた。石室前面には天井石の一つと見られる石材が転落していた。

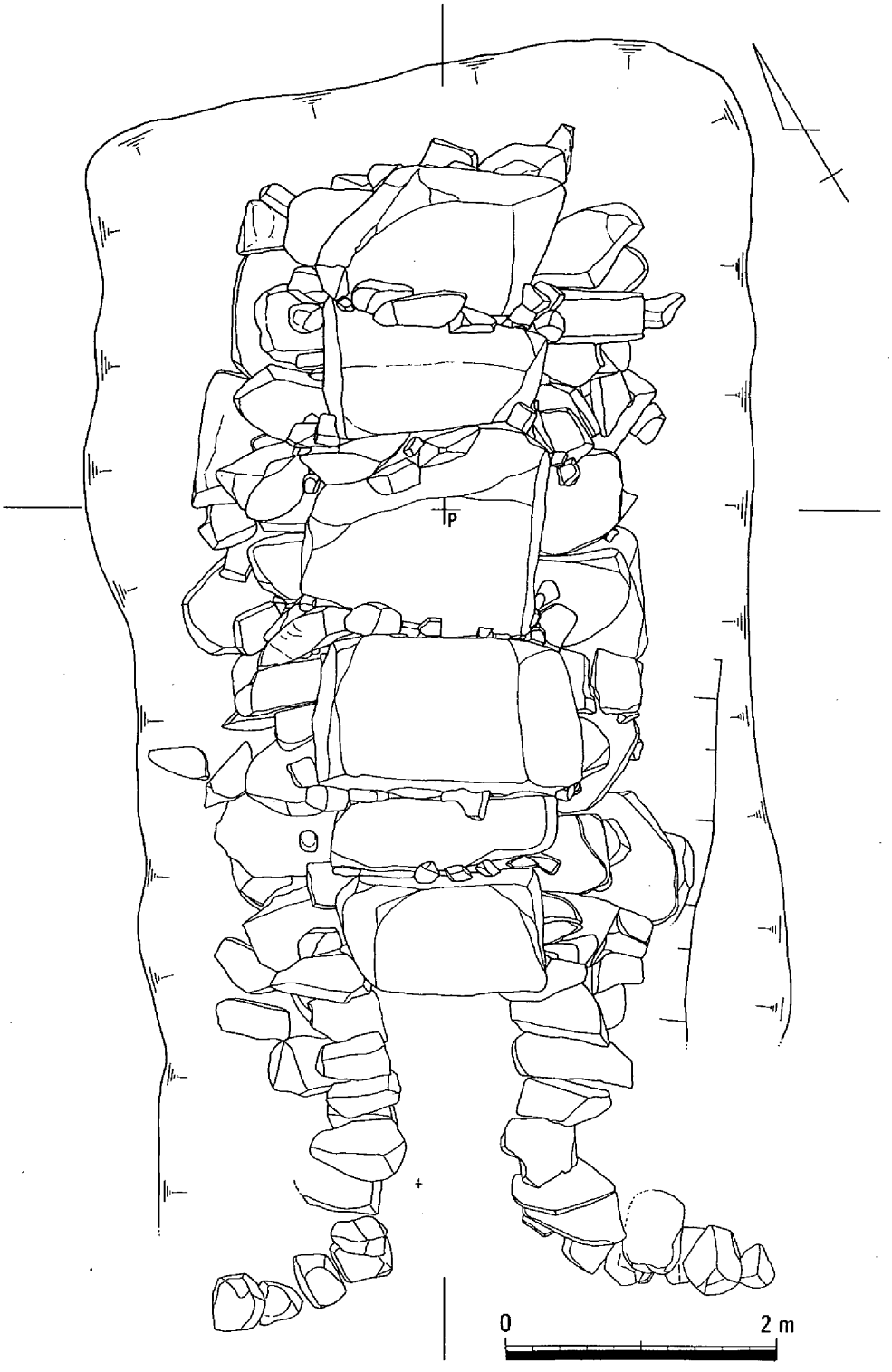
石室は無袖の横穴式石室で，石室床面での計測値は，全長7.6m，奥壁幅1.7m，HH′間1.45m，入口部1.0mを測る。石室高は，奥壁部1.8m，HH′で1.85m，南入口付近で1.6mを測る。石室平面形から判断すると，東側壁はほぼ直線的に配列しているのに対し，西側壁は側壁中間付近から入口に向って徐々に内側に狭まっており，側壁の傾斜も強くなっている。さらに天井石も前面の2枚が奥より約20cm低く設置されていること等から，玄室と羨道の区分が意識されていた様である。石室中軸線の方向はN30°Eを測る。使用石材は，当古墳の所在する鳩ケ岩山に産する花崗岩の転石である。

奥壁は，中央に高さ1.8m，幅1.5m，厚さ60cm程の大形の扁平な石材を設置し，東側壁との間に縦長の長さ1.1m，幅30cm程の石材を置き根石としている。この2枚の根石の設置により，空間部のできた右上半部に，数個の石材を小口積として充填している。奥壁上端の天井石との間には，小形の割石を詰込んでいる。

ほぼ直線に配列された東側壁は全長7.2mを測る。根石は，入口の2個がやや小形の石材である以外は，大形の石材の整った面を内側に使用し，一部を横口積とするほかは，広口積としている。上部への積上げは，床面から高さ1.5m程で平担面となる様に石材を調整し，横口もしくは広口積みに2～3段，多くて4段の積み上げを行い上段を揃えている。

これに対し，石室前半部が徐々に内弯する西側壁は，全長7.55mと，東側壁より若干長い。石室入口の長さ2m程の間は，基底部も他の根石と比較して小形の石材で，上段への積み上げも粗く内面も不揃いで，かなり持送り気味に傾斜している。入口付近を除く，石材の上部への積上げは，東側壁と同様に大形の石材の上に1～3段積上げ，高さ1.5m程で上端面を揃えている。

両側壁の上端面レベルを揃えた後に，奥壁から4.0mまでの玄室にあたる部分に，もう一段厚さ20～30cmの石材を持送り気味に，横口もしくは小口積に設置し，その上面に4個の天井石を設置している。これに対し，羨道部を意識した前半部両側壁は，直接天井石を設置しているため，約20cm程低い天井部となっている。このことは墳丘断面の状況が，奥壁もしくは側壁の



第13図　石室平面図　(S＝1/50)

上端から20～30cm下方で，上部盛土と下部盛土に差が認められ，石室の構築が一度ここで整えられたことと合致する。

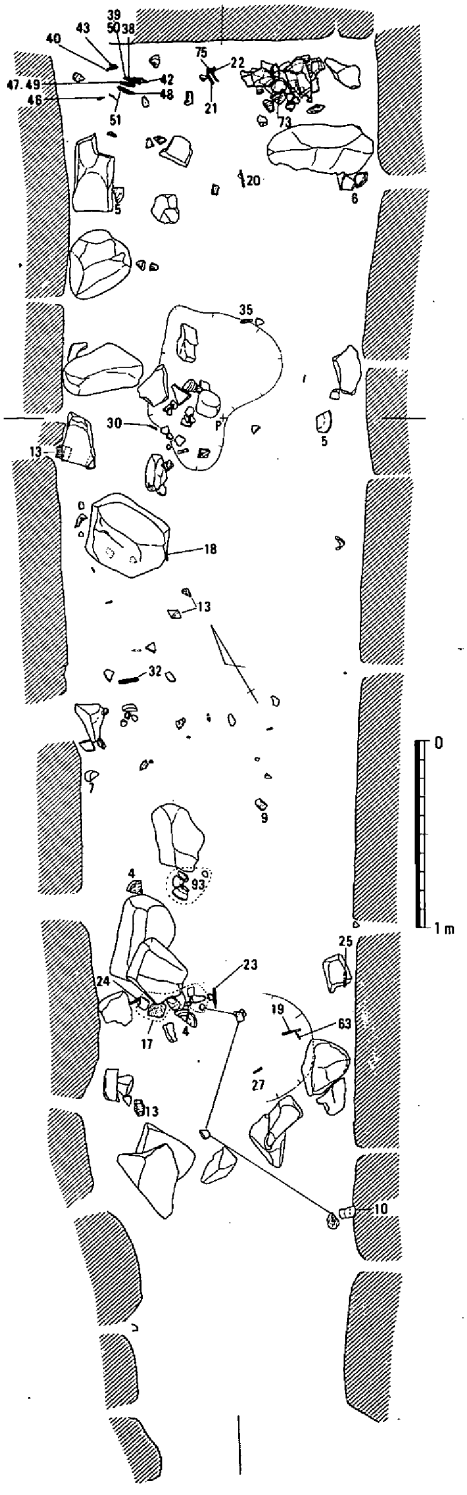
天井石は，調査時６枚現存し，石室前面に一枚それらしき石材が転落していた。天井石消失部分の長さから最低もう一枚が必要で，計８枚程であったと推定される。現存する６枚は，長方形もしくは方形に近い石材を使用し，最大で長辺2.0×短辺1.1m，最小で長辺1.65×短辺0.55m，厚さ40～55cmを測る。これらの石材の平担面を下面にし，石室長軸に長辺を直交させ石室上面に乗せている。天井石間の隙間は，小形の割石を使用し埋め込んでいる。

石室入口は，両側に八字形に開く列石を構築し，入口に４～５枚の閉塞石が配置されている。閉塞石は床面から厚さ10cm程のややしまった土層の上に40～50cm大の割石を一段やや乱雑に組んでいる。両側の列石は，羨道端（石室入口）から連続して構築されており，東側列石で２～３段，西側で基底部のみが現存している。

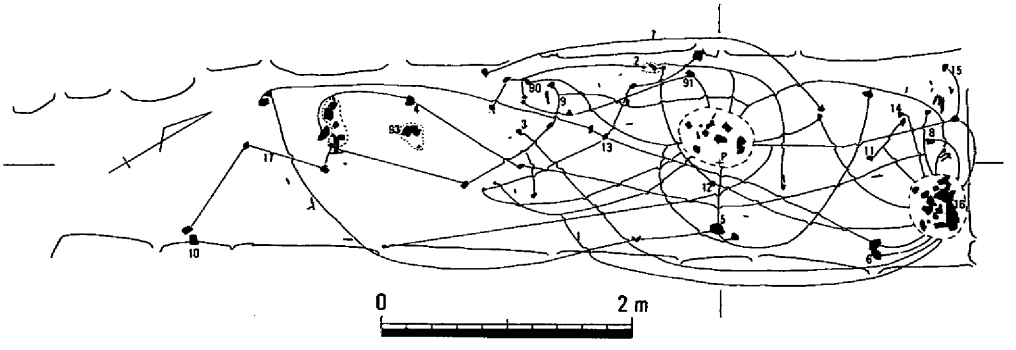
第４節　遺物の出土状況

出土遺物は，須恵器，古代・中世土器，鉄器，耳環，滑石製紡錘車，臼玉等である。出土場所は，石室内，石室前面の南斜面と周溝中からの出土である。

石室内埋土の状況は，入口付近の天井石が失われており，これによって墳丘盛土が，入口付近に厚く堆積し，高さ40cm程しか開口しておらず，やっと石室内に入れる状況



第14図　石室内遺物出土状態　（S＝1/40）



第15図　石室内出土遺物接合関係図　(S＝1/60)

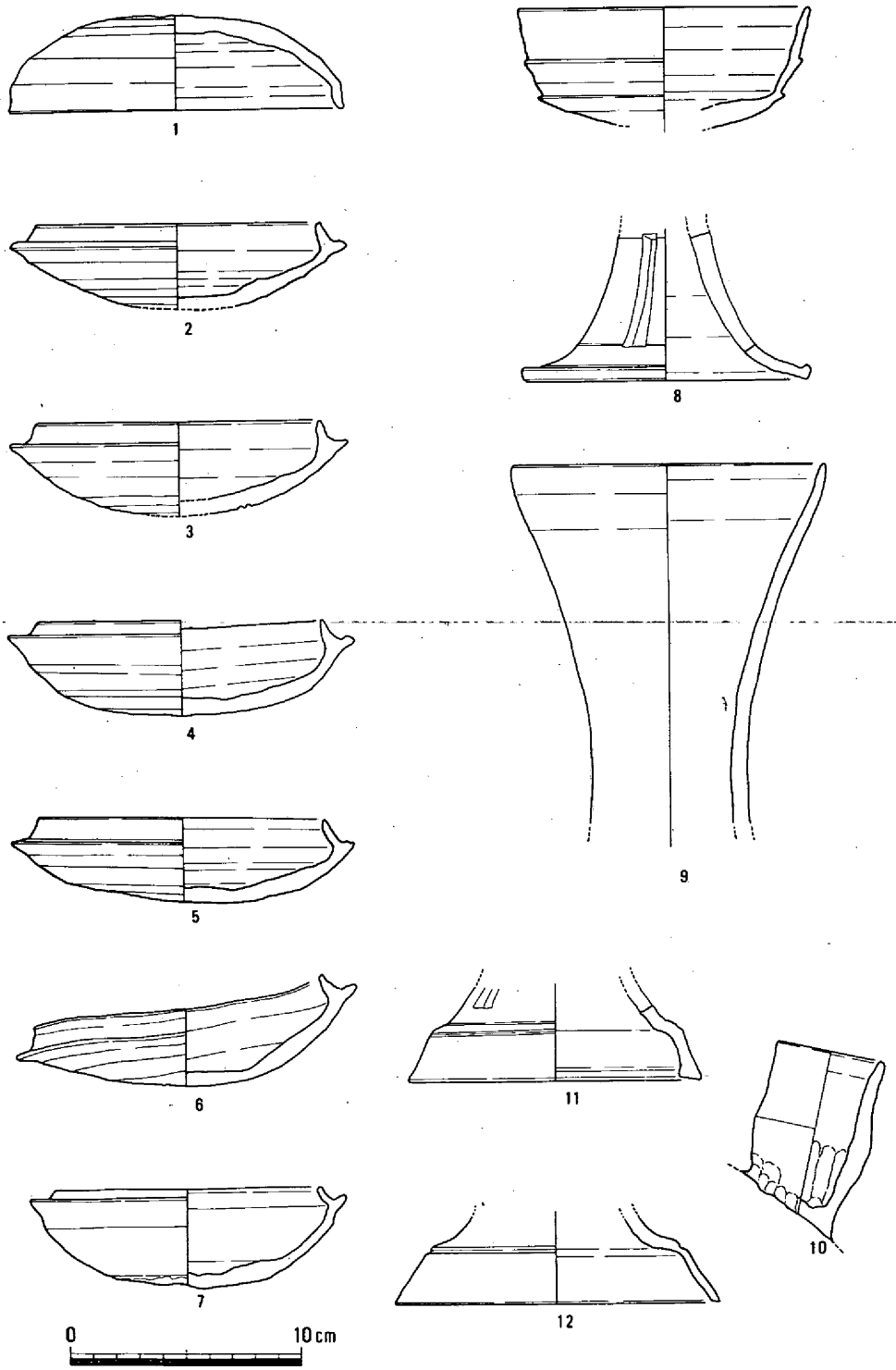
であった。この墳丘盛土の二次堆積は石室奥に向って徐々に薄くなっている。石室中央から奥壁付近では，腐植土及び盛土除去後の石室内埋土は，20cm程と薄く，石室天井部まで170～180cm程の空間があった。埋土中からは，古墳に伴う遺物以外に，古代末から中世の遺物が出土している。出土須恵器も石室奥壁付近のものが，羨道付近のものと接合する等，石室内の攪乱が著るしく，原位置や，完形を保つ須恵器は1点も認められなかった。

第14，15図は，石室内の遺物の出土状況及び須恵器，古代末・中世土器の接合関係図である。これらの遺物のうち原位置もしくは，原位置に近い状態を示していた遺物は，奥壁北西隅の鉄鏃（37～43，46～51）と，奥壁中央の耳環（75）のみとみられる。

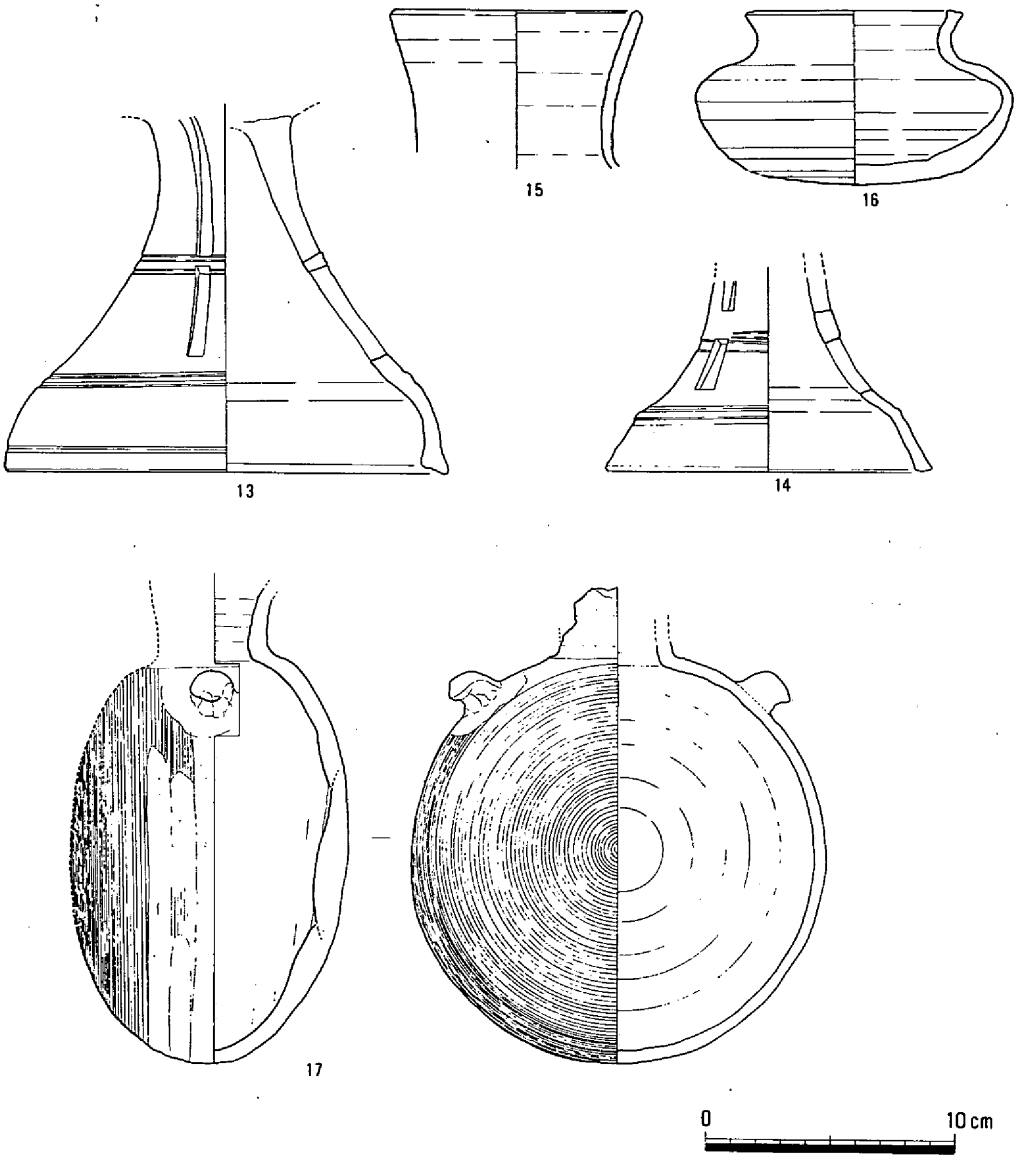
この他，石室内で遺物の特に集中した場所は，左奥壁隅と石室中央付近である。これらの場所は，いずれも石室床面より下方に若干掘り込んだ中に古代末・中世土器やスミ等の混る状況で破片となった須恵器等が折り重なっており後世の攪乱による二次的な堆積であった。

出土須恵器のうち提瓶（17）は，羨道に近い場所の比較的狭い範囲に散っている状況から察すると原位置に近い可能性が強い。鉄器は，鉄鏃，刀子，鉄釘等実測可能であったもの55点，その他埋土のふるいによる選別を行った中の小破片はかなりの数にのぼる。このうち前述の如く，奥壁近くでかろうじて原位置を保っている唯一の遺物を検出している。奥壁北隅の鉄鏃13点は，いずれも刃先を内側（石室中央）に向け，ほぼ原位置に近い状況を呈している。右側壁との間隔が30cm程しかないことや，矢の長さ等から判断すると，おそらく奥壁もしくは，側壁に一括した状態で立て掛けていたものであろう。耳環は2点出土している。このうち（75）は石室奥壁近くの床面から出土しており原位置に近いものとみられる。滑石製紡錘車（73）は，5個の細片となり，奥壁左の須恵器片の堆積中から一点と，その他玄室内の埋土中から出土している。

石室外からは，周溝内および，石室前面から若干の遺物が出土している。特に，周溝内の南西部付近では，一個所に集中して須恵器の甕体部の同一個体が出土し，南斜面にかけても，南



第16図　出土遺物(1)　(S＝1/3)



第17図　出土遺物(2)　(S＝1/3)

西部の周溝付近から転落したとみられる甕片を採集している。周溝中出土の甕は，体部の一部のみで，しかも，周溝底面よりは若干浮離した状況であった。

第5節　出　土　遺　物

調査によって出土した遺物の状況は，前述の様に細かく打ち砕かれたものや，部分的にしか残存していないものが多く，かなり散逸している様であった。種類は，古墳に伴うものとして

須恵器，鉄器，（鉄釘，鉄鏃，刀子，飾り弓両頭金具等），紡錘車，臼玉，耳環，直接古墳に伴わないものとして古代末～中世土器，石鏃が出土している。図示した遺物のうち土器，臼玉，耳環については，形態や調整等を観察表及び計測表として作成した。

1．須恵器（第16・17図，図版19・20）

図示したもの17点以外に，杯・甕等の破片が若干出土している。器種は，杯蓋，杯身，高杯，長頸壺，装飾壺の装飾部，短頸壺，提瓶，甕などである。脚台部（11～14）のみで器形の断定しかねるものもみられる。杯身（2・3・6）高杯（8）は，いずれも攪乱により原位置をとどめるものではないが，焼成，色調，胎土等から判断して同一窯による製品の可能性が強い。

杯身（2～6）は，口径12.2～12.6cm，受部立上り0.8～1cmとほぼ同形同大のものである。これと同時期のものが径14.3cmを測る杯蓋（1）であろう。杯蓋の外面天井部，身の外面底部ともすべてヘラ削り調整を行っている。これに対し，杯身（7）は，口径11.5cm，受部立上り5mmと小形化し，外面底部も未調整である。器形特徴から，時期的に前者のものより後出するものである。高杯（9）は，杯部と脚部が直接接合はしないが，胎土，焼成，色調等から同一個体とみられる。杯部外面に二条の明瞭な陵を持ちシャープなつくりである。脚部は，長脚二段透の下半部とみられ，三方向に透孔を施す。脚端部は，上部に持ち上げた様にふくらみを持つ。（9）は，大形の長頸壺もしくは台付長頸壺の口縁部である。これと同一の焼成，胎土を示すものが，（10）の装飾壺の装飾部と（13）の長脚二段透を持つ脚台である。破片が少なく，いずれも直接接合しないため推定の域を出ないが，脚台付の装飾長頸壺の可能性が考えられる。

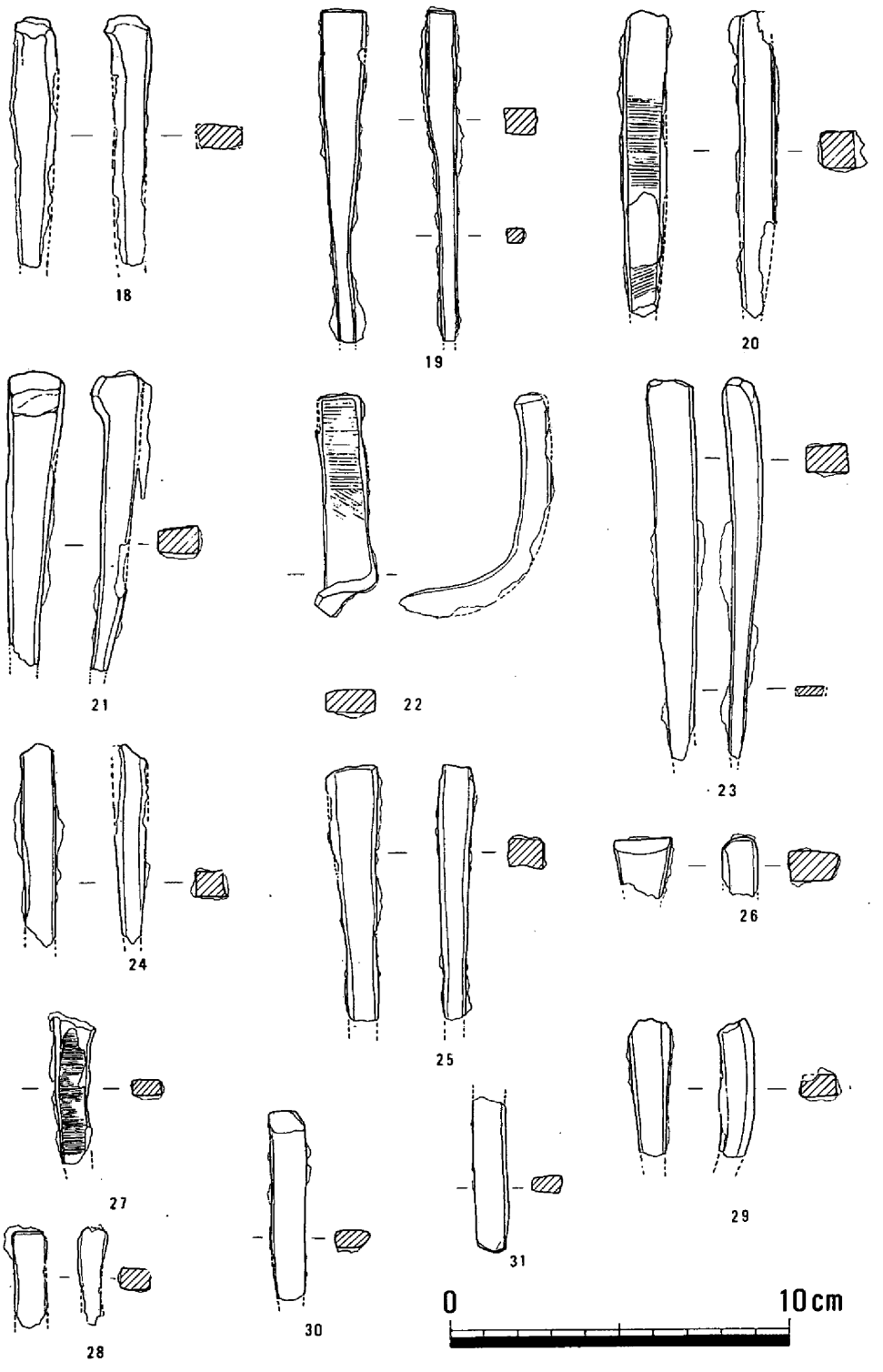
2．鉄器他（第18～22図，図版21～23）

鉄釘（18～31）　図示した14点以外にも銹化して剝離したものや攪乱により細片となったものが出土している。これらの鉄釘は，いずれも原位置をとどめていたものは少なくかなり移動している様子であった。耳環（75）に接して検出した鉄釘（21・22）は，床面に接した状況であったが，原位置か不明瞭である。出土鉄釘は，頭部近くが一辺1cm程の方形もしくは，長辺1.3～1.4cm，短辺0.7～0.8cm程の長方形の断面を呈し，長さ12～13cm程のやや大形のもの（18～26）と，長辺0.8～0.9，短辺0.5～0.6cm程の長方形の断面を呈すやや小ぶりのもの（27・28）が出土している。外面に木質の残るもの（20・22・27）や大きく弯曲したもの（22）も認められる。

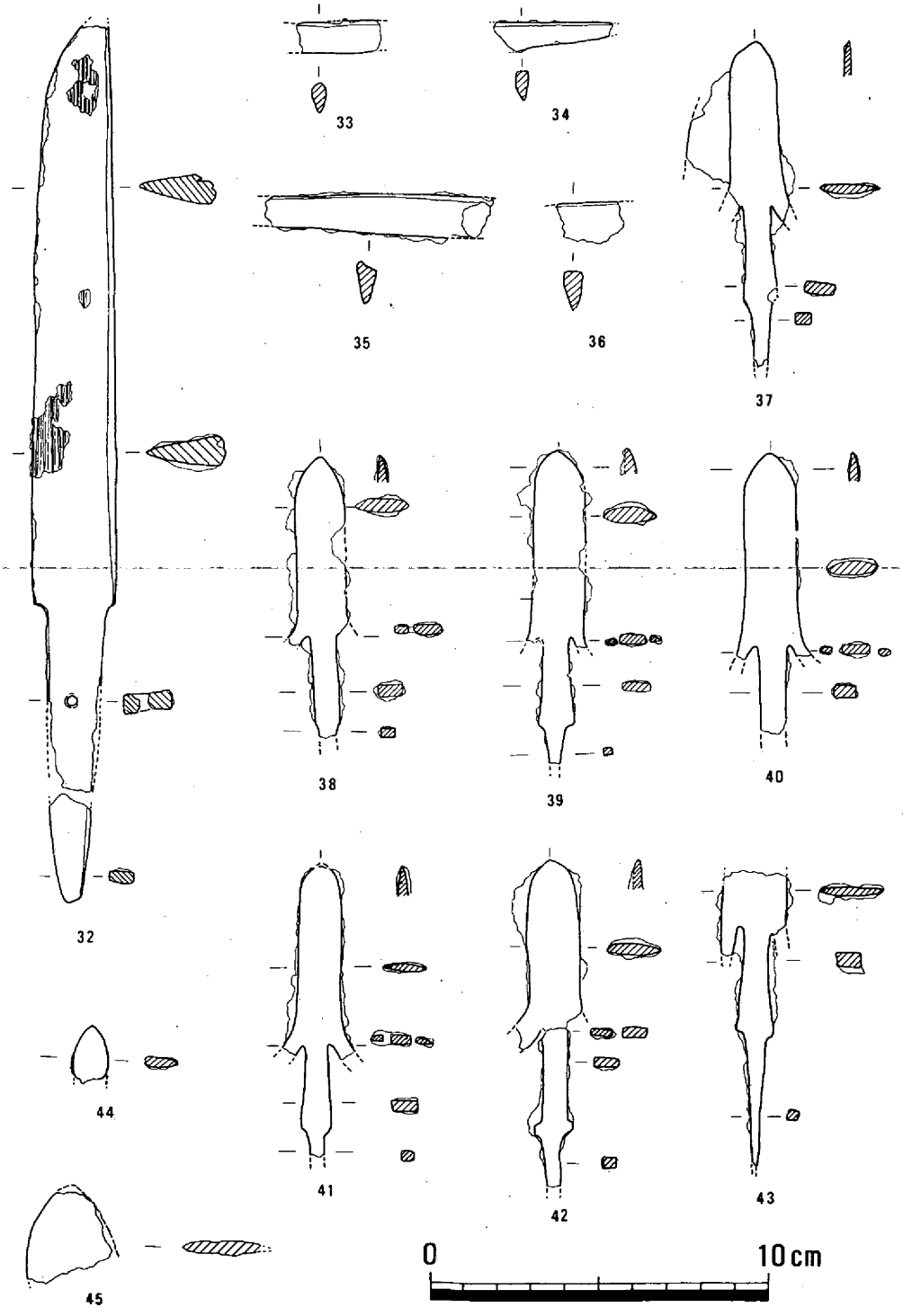
小刀（短刀）（32）　身先端部を一部欠くが，推定全長27.0cm，身残存長17.0cm，身幅2.5cm，棟幅0.8cmを測る。身部には一部木質が残る。茎部は，残存長8.5cm，最大幅1.8cmを測り，茎尻に向って徐々に幅を減じている。茎の中央やや身部よりに径0.3cm程の目釘孔を一ケ所穿っている。

刀子（33～36）　いずれも小片で刀子と断定しかねるものが多い。（34）は刃部の一部とみられ，砥ぎへりしている。（44）は，尖根式の鏃もしくは，刀子身部の先端とみられる。

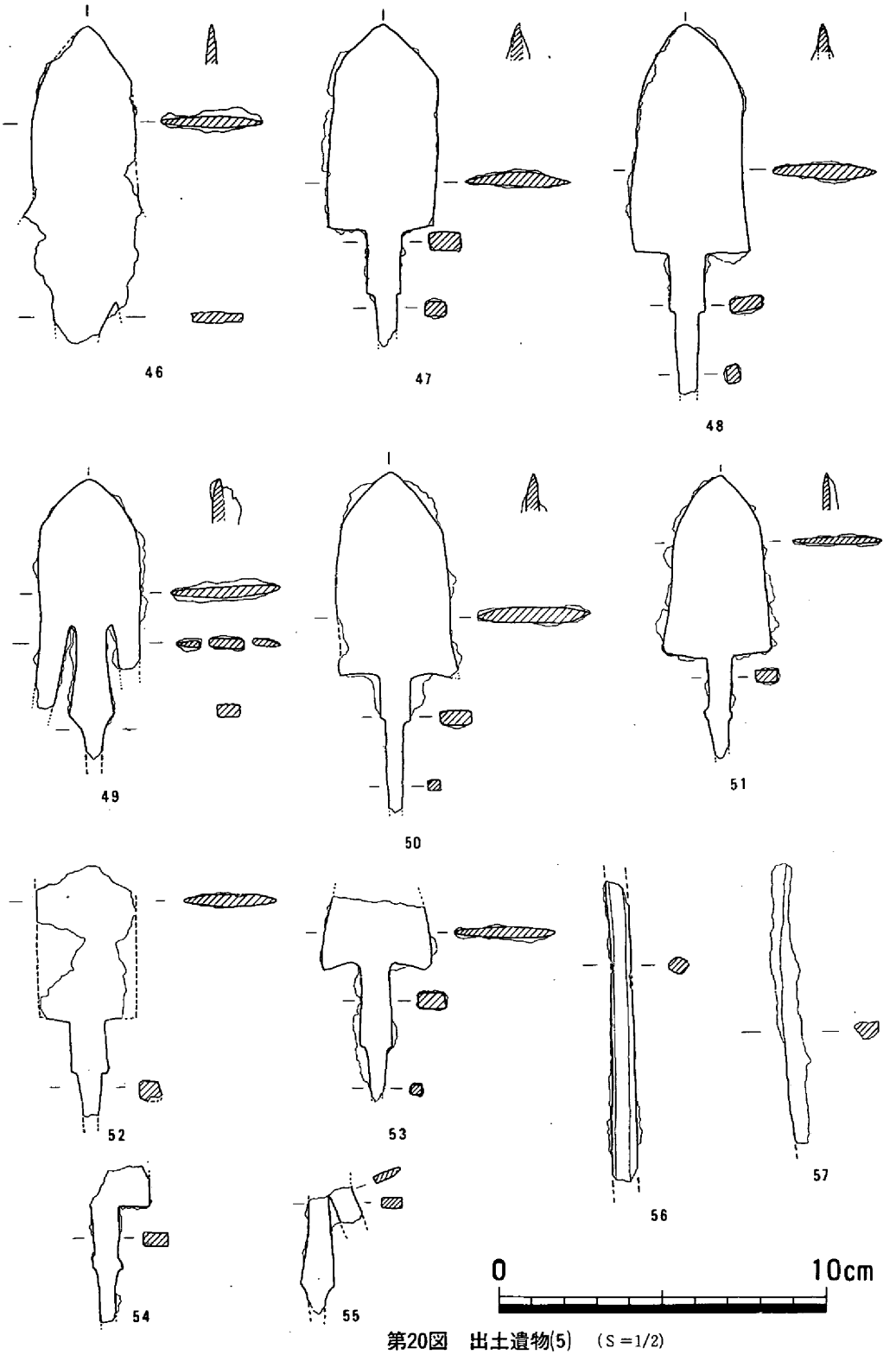
鉄鏃（37～57）　計測可能なもの32点を図示した。これ以外にも茎部や刃部の小片が出土し



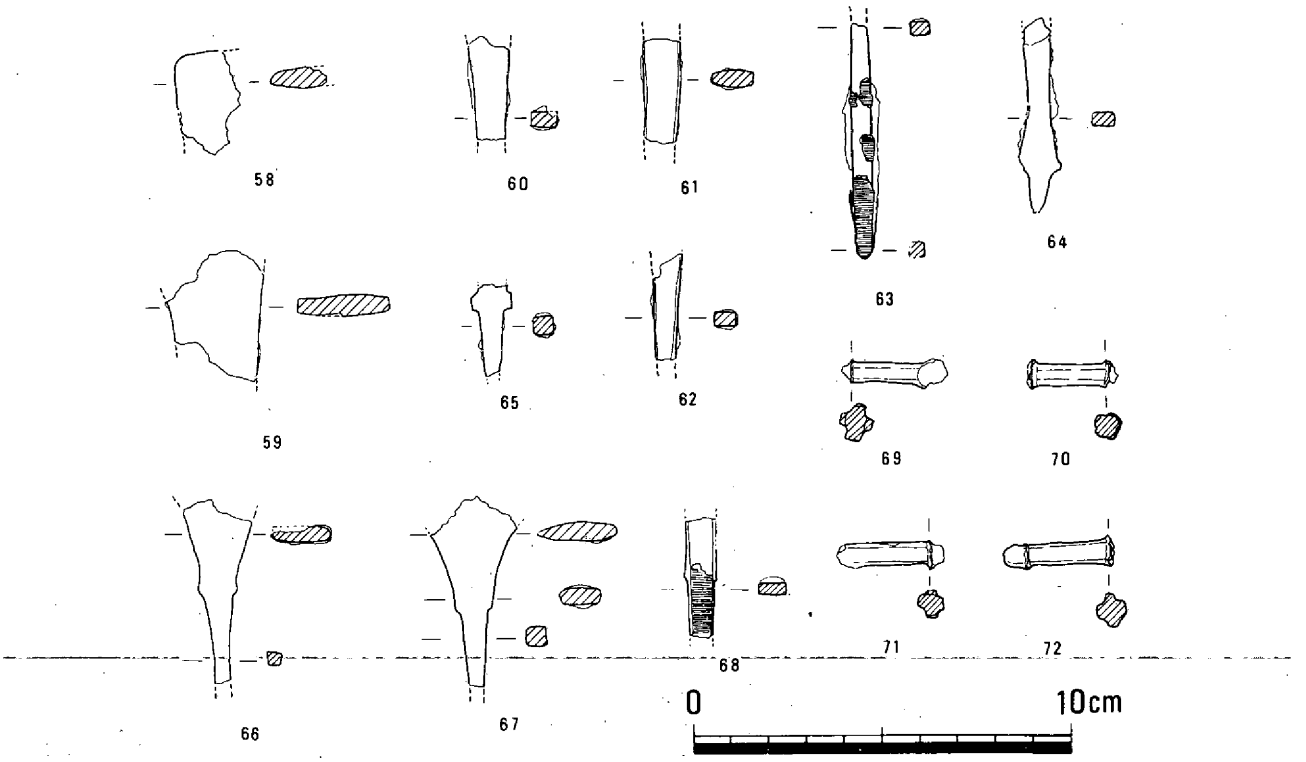
第18図　出土遺物(3)　(S＝1/2)



第19図　出土遺物(4)　(S＝1/2)



第20図　出土遺物(5)　(S＝1/2)



第21図　出土遺物(6)　(S＝1/2)

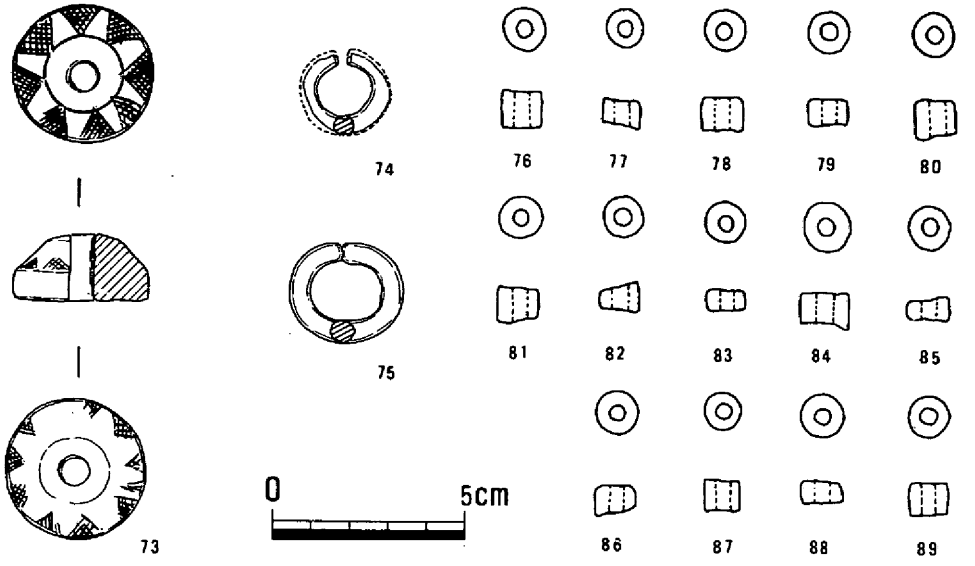
ている。出土状況の項で記述した如く，石室北隅でほぼ原位置を保って出土したものが13点を数え，それ以外では，石室内の埋土中からのものがほとんどである。

全体に平根式の鉄鏃が多く，尖根式は，長頸鏃の箆被部（56・57）以外は不確かである。平根式のうち（37～43）は，幅1.5cm前後の刃部を持ち，刃先部を丸くおさめている。いずれも逆刺を有すほぼ同形同大のもので全長12cm程である。幅広の平根式（49～54）のうち（49）は逆刺を持つ。(46）の平根式鉄鏃は銹が著しいが，身下部に逆刺の痕が残存している。(53）は関部が下方に下っている。(58・59・66・67）の身部断面は長方形を呈し，鑿頭式のものである。

飾り弓両頭金具（69～72）　石室内埋土中から４点検出した。現存長2.3～2.9cmの棒状を呈し，中心部の幅２cm前後に木質が残る。両側の木質に接する場所に薄板が加工され花弁状に広がっている。両端は（72）の左端の様に丸く加工されていたものと思われ，全長３cm程と推察される。

木質残存部の長さは（69）2.1cm，（70）2.0cm，（71）2.1cm，（72）2.2cmを測る。径はいずれも0.5cm前後である。

滑石製紡錘車（73）　石室奥壁付近の埋土中から出土したほぼ復元完形のものである。上面径1.7cm程，下面径3.61cm，高さ1.74cm，穿孔径0.65cm，重さ31.16ｇを測り，緑灰色を呈す。



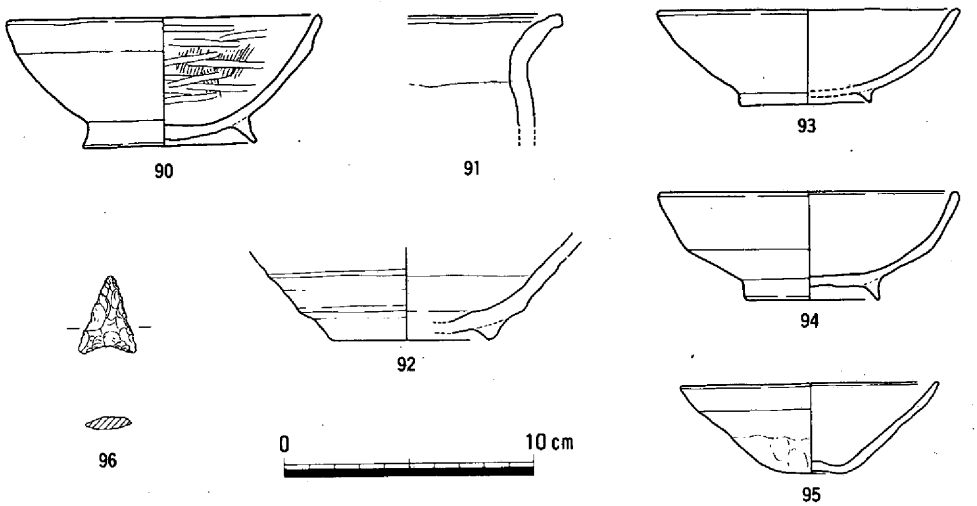
第22図　出土遺物(7)
（S＝1/2・臼玉は原寸）

第1表　耳環計測表

番号	長径(cm)	短径(cm)	断面(cm)	接合部間隔(cm)	重量(g)	調査時
74	2.12(残存)	2.0(残存)	0.5	0.3	3.90	玄室左埋土
75	2.9	2.5	0.53	0	10.24	No.41

第2表　臼玉計測表

番号	径(cm)	孔(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
76	0.55	0.18	0.44～0.475	0.24
77	0.49	0.18	0.33～0.42	0.14
78	0.505	0.2	0.39～0.42	0.18
79	0.5	0.2	0.3～0.37	0.16
80	0.56	0.175	0.44～0.48	0.25
81	0.55	0.185	0.27～0.465	0.19
82	0.525	0.19	0.24～0.4	0.14
83	0.51	0.18	0.23～0.24	0.11
84	0.58	0.185	0.4～0.5	0.25
85	0.53	0.19	0.23～0.31	0.13
86	0.5	0.15	0.27～0.35	0.13
87	0.49	0.185	0.38～0.415	0.14
88	0.545	0.185	0.24～0.28	0.12
89	0.52	0.215	0.37～0.42	0.19



第23図　出土遺物(8)　(S＝1/3・石鏃は1/2)

側面と底面に裾歯文内を格子で埋めた文様を施している。中央穿孔内には鉄心の銹が付着している。文様は残りが悪く，底面では特に不鮮明な部分が多い。上面は，8ケ所に鋸歯文を施している。

耳環（74・75）　2点出土した。(75) は奥壁中央付近のほぼ床面から，(74) は玄室内の埋土中からの出土である。最大径がかなり異なり，対にはならない。(74) は銹化が著しく進行しており，銅地が半分程の所もある。(75) は表面は銹化しているが，ほぼ形状を保っている。いずれも銅心銀貼り製である。

臼玉（76〜89）　計14点出土した。緑灰〜明緑灰色を呈す滑石製の臼玉である。いずれも埋土の選別作業中からの出土で原位置は不明である。口径は5〜6㎜程度のものである。厚さは，両端が不揃いなものが多く，一定しない。

3．古墳に伴わない出土遺物（第23図，図版20・23）

周溝，墳丘周辺及び石室内から，直接古墳の築造や埋葬に伴わない遺物が出土している。(90〜92) は平安時代，(93〜95) は鎌倉時代のものである。いずれも土師質を呈し，石室内から出土している。

(90) は，内面に炭素を吸着させた黒色土器で内面ヨコ方向のヘラミガキを施し，付高台の椀形土器である。(93・94) は，同じく付高台を有す椀形土器で，(95) は，底部中央が内側にくぼんだ形状を呈す。(96) は石室前面の南斜面から発見したサヌカイト製の無茎打製石鏃である。基底部は，円弧状に内弯し，直線的な刃部を有す。重量は0.54ｇである。弥生時代のものであろう。

第3表　土器観察表

番号	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	手法・形態・特徴	出土位置・調査番号	備考
1	杯蓋	口径14.3器高4.1	微砂	やや軟質	淡灰褐色	天井部外面右回りヘラ削り 〃　内面一部ヘラ削り	羨道～玄室 91・119・120・121他	復完
2	杯身	口径12.2器高4.1 立上り0.8	細砂多	良好堅緻	灰青色	底部外面左回りヘラ削り 他はヨコナデ	羨道～玄室 67・81・83他	3・6・8と同一窯 一部欠損
3	〃	口径12.3器高4.0 立上り0.9	細砂	〃	〃	〃	羨道～玄室 22・85他	2・6・8と同一窯 1/3残
4	〃	口径12.25器高4.1 立上り0.8	〃	〃	暗灰色 薄く全体自然釉	底部外面右回りヘラ削り 他はヨコナデ	羨道～玄室 3・23・88・100他	復完
5	〃	口径12.3器高3.6 立上り1.0	〃	〃	灰青～灰褐色 一部自然釉	〃	玄室奥 7・8・45・51・65他	2・3・8と同一窯 復完
6	〃	口径12.6器高3.5 立上り0.9	〃	〃	暗灰青色	肩部外面左回りヘラ削り 他はヨコナデ	玄室奥 16・25・116他	残2/3
7	〃	口径11.5器高4.2 立上り0.5	〃	良好	(外)灰色 (内)淡褐色	底部外面ヘラ切り未調整 他はヨコナデ	玄室 42・80他	残1/2
8	高杯	口径12.5底径12.0	微砂	良好堅緻	灰青色	ヨコナデ 長脚二段透し，3ケ所透孔	石室前面～玄室 4・12・19・114・117・127他	2・3・6と同一窯 残1/3
9	長頸壺	口径13.3	〃	〃	暗灰青色 自然釉有	ヨコナデ	玄室 77・89他	10・13と同一個体か 頸部のみ
10	装飾壺	口径4.5器高8.0	〃	〃	黒灰～暗灰青色 一部自然釉	内面底部凹凸有，他はヨコナデ 底面は本体部との接合痕	羨道 11	9・13と同一個体か 装飾部のみ
11	脚台	底径12.4	〃	〃	灰～淡灰青色 一部自然釉	内外面ヨコナデ 3ケ所に透孔	羨道～玄室 7・13・26・118他	歪み 脚部のみ
12	脚台	底径13.9	細砂	良好堅緻	灰青～灰茶褐色 一部自然釉	ヨコナデ 透孔3ケ所	玄室 49・128他	脚部のみ
13	〃	底径17.2脚高14.0	微砂	〃	灰黒色 薄く自然釉	ヨコナデ 長脚二段透，3ケ所透孔	羨道～玄室 24・64・72・108・129他	9・10と同一個体か 脚部のみ
14	〃	底径13.1	〃	軟質	淡灰黄褐色	ヨコナデ 長脚二段透，3ケ所透孔	羨道～玄室奥 6・20・124	脚部のみ
15	短頸壺	口径8.7器高7.0	細砂多	良好堅緻	淡灰色	外面体部下半右方向ヘラケズリ 他はヨコナデ	玄室奥 1・2・126他	残1/3
16	〃	口径10.0	微砂	〃	青灰色	ヨコナデ	玄室奥 122他	口縁のみ
17	提瓶	体部径16.5	細砂	〃	暗灰青色 肩自然釉	体部外面カキ目，一部左方向ヘラ削り 頸部ヨコナデ	羨道	残2/3
90	椀	口径12.3器高5.2	微砂	良	(外)赤褐色 (内)黒褐色	内面ハケ目のちミガキ，黒褐色 貼付け高台	羨道～玄室 52・78	黒色土器 一部欠損
91	甕		細砂	良好	暗灰褐～暗橙褐色	口縁内外ヨコナデ，体部内面ナデ，体部外面タテ方向ハケ	玄室	土師器 小片
92	椀	底径6.5	〃	〃	橙褐色	内外ロクロナデ	玄室	土師質 小破片
93	〃	口径11.8器高3.8	細砂多	良	黄褐色	ヨコナデ 貼付け高台	羨道～玄室 95他	早島式土器 一部欠損
94	〃	口径11.8器高4.3	細砂	〃	淡黄橙色	〃	羨道	早島式土器 残1/3
95	〃	口径10.2器高3.6	〃	良好	白褐色	内面～口縁外面ナデ，底部外面指頭圧，口縁下部カキ取り，上底	羨道	残1/2

第4章　ま　と　め

今回発掘調査を行った鳩ケ岩山古墳は，岡山市三和479番地ほか（旧馬屋上村）に所在し，標高200～300ｍの吉備高原の南端にあたる。南部平野部と比較し，遺跡の粗な地域にあたるものの，昭和５年刊行の岡山県通史には馬屋上村内に６ケ所９基の古墳の記載があり，そのうち１基が先年調査を行った龍王塚古墳にあたる。ただ鳩ケ岩山古墳はこの時点では周知されていない。

当古墳が周知されたのは，以外に新しく，昭和48年に刊行された馬屋上村史に９基確認され，そのうち，最も保存良好な鳩ケ岩山山頂の古墳として，略図，写真とともに記載されているのが初見である。昭和58年刊行の岡山市遺跡地図によると，馬屋上地区に計16基の古墳が周知され，このうち鳩ケ岩山周辺に計５基（村史記載分を含めると６基）が記載されている。ただ地籍台帳によると当古墳の墳丘部50㎡程は官有地（岡山市）となっていることから，かなり以前から墓地として認識されていた様ではある。

さて，発掘調査による古墳の規模は，第３章に記述した如く，比高差80ｍ，標高284ｍの丘陵尾根上に位置し，南西に開口する横穴式石室を内部主体とする径12.5×11.0ｍ，最大高3.0ｍを測るややハート形をなす円墳と判明した。墳丘東側には半円形に列石を巡らし，石室入口にも八字形に開く列石が構築されている。周溝は古墳の北東端が最も浅く，墳丘両側に徐々に深さを増しながら掘削され馬蹄形に巡っている。石室開口部が南西を向き，墳丘部列石が東半に構築されている等，南東～南西方向を意識した築造と言えよう。

内部主体は横穴式石室である。石室は全長7.6ｍ，奥壁幅1.7ｍ，入口部幅1.0ｍ，玄室高1.8ｍ，羨道部高1.6ｍを測る。平面形は無袖の形状をなすものの天井石の設置が玄室と羨道部で20㎝の高低差が認められる。

埋葬主体は第15図の接合関係図の如く，石室内の攪乱が著しく，現位置を保っていた場所もわずかに奥壁の一部のみの状況であったことから，棺痕跡や埋葬主体の確認は行えなかった。ただ副葬品中の２点の耳環が，形状や大きさが異なり対となりえないこと，棺釘が大小２種類に分類可能なこと，出土須恵器にも形態差が認められること等から，多くの横穴式石室墳の例にもれず，追葬による複次埋葬が行われたことが言える。

出土遺物は須恵器，鉄器，滑石製紡錘車，耳環，臼玉等である。このうち時期決定に有効な判断材料となる須恵器，特に有蓋杯の分類から，古墳の時期に検討を加えてみたい。図示した杯は，杯身口径12㎝強，受部立上り0.8～1.0㎝を測り，底部外面にヘラ削り調整行ったものと（一類），これに対し，一回り小さく口径11.5㎝，受部立上り0.5㎝程と低くなり，底部外面も

ヘラ切り離しのみのもの（二類）と２分類が可能である。杯蓋は径14.3cmを測り，天井部外面にヘラ削りを行っており，前者に伴うものである。

二分類した杯類を比較した場合，後者に器種の矮小化や器面調整の簡略化等がうかがわれ，須恵器の編年にしたがうと前者から後者への推移がたどれる。

これらを陶邑窯の田辺編年に対応すれば，一類がＴＫ43型式，二類がＴＫ209型式もしくは若干後出する時期に，同じく中村編年によるⅡ型式４段階からⅡ型式５段階に相当するものとみられる。実年代として６世紀の第４四半期から７世紀の第１四半期の間の年代が考えられる。

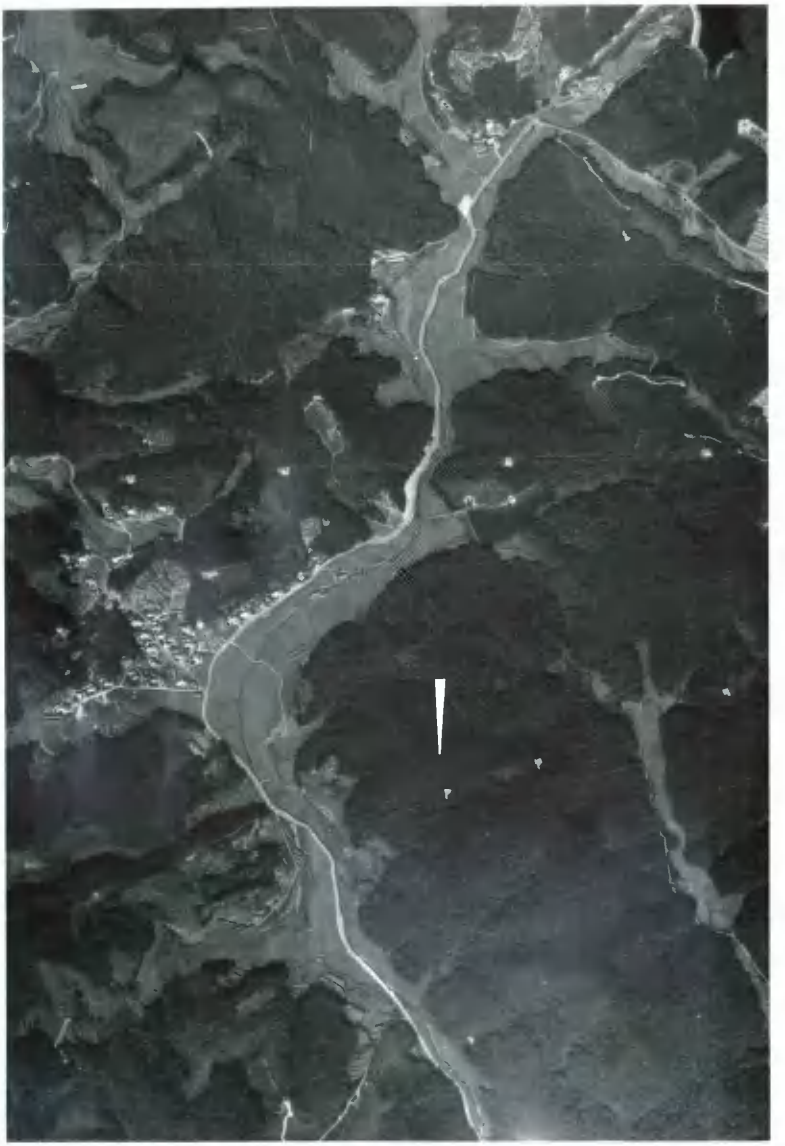
一方，県内の窯跡資料のうち二類に類似するものに備前寒風窯，備中寒田窯が掲げられる。寒風１－Ⅱ号窯出土のＡ類の杯身は，口径９～10cmを測るものが主体を占め，灰原からは，比率は低いが宝珠形つまみの新器種の出現を見ており，古墳時代的な蓋杯の最終段階にあたるものとみられている。また，寒田窯出土資料では，宝珠付等の新器種は製作されてなく，古墳時代以来の蓋杯が主体を占めている。寒風Ａ類より相対的に口径も大きく，受部の立上りも高く，若干先行するものとみられる。これらの窯跡資料は，いずれも底部外面調整がヘラ切り離しのみで，鳩ケ岩山古墳出土の二類と類似するものの，口径，受部立上りは，いずれも小さく，矮小化が最も進んだ時期にあたっている。鳩ケ岩山古墳二類は，寒風窯Ａ類や寒田窯出土資料よりは，先行する時期があたえられよう。

以上，鳩ケ岩山古墳の調査成果について述べてきたが，日応寺，三和地区には，安部倉川流域に沿って計16基の後期古墳が現在周知されている。これらは，大きく安部倉，面室，鳩ケ岩山の３群に区分でき，このうち鳩ケ岩山古墳，龍王塚古墳の２基が発掘調査され，第４表の如く，その内容が明確になった。

第４表　古墳比較表

	規模(m)	石室(m)	須恵器(cm)	馬　具	刀	鉄　器	装身具	その他
鳩ケ岩山古墳	径12.5×11.0 高3.0 墳丘列石	全長7.6 無袖 玄室 長4.1 幅1.45～1.7 高1.8	杯蓋径14.5 杯身口径 11.5～12.5 装飾壺	無	(短刀)	鉄鏃 刀子 飾り弓金具 棺釘	臼玉 耳環	紡錘車
龍王塚古墳	径約17.0 高3.0	全長10＋α 片袖 玄室 長4.5 幅1.6 高1.8	杯蓋径 11.7～14.3 杯身口径 11.35～12.93	轡，鏡板 辻金具，留金具 鈴具，兵庫鎖 壺鐙，輪鐙	大刀 金銅製柄頭片 金象嵌鍔	鉄鏃 刀子 釣針 棺釘	勾玉 切子玉 耳環	鉄滓 炉壁

さらに，上記以外に計測値のみだが石室幅1.0m以下，墳丘規模10m未満の小古墳が存在している。周囲より隔絶された感のある山間部の総数20基にも満たない，後期古墳にも，石室規模，形態等に多様なあり方を示している。特に今回の調査二例からは，金銅装の大刀を持ち，馬具を有すものと，これらを持たないものの差が，墳丘規模，石室構造等に現われており，被葬者の階層的な差異が顕著に認められる好資料と云えよう。



周辺航空写真（矢印古墳位置）

図版 2

1　古墳遠望(南方上空から)　↑

2　古墳全景(西方上空から)

1　古墳遠景(西から)

2　調査前の状況石室入口(南西から)

図版 4

1　調査前の状況(東から)

2　墳丘表土除去後(東から)

1　墳丘全景(南西から)

2　墳丘全景(東から)

図版 6

1　石室入口表土除去後（南西から）

2　石室入口閉塞状況（南西から）

3　石室入口閉塞石除去後（南西から）

1　墳丘列石(東から)

2　墳丘列石・周溝(北東から)

図版 8

1　墳丘東側周溝(南から)

2　墳丘西側周溝(北東から)

1　周溝ＡＰライン断面(北東から)

2　周溝ＢＰライン断面(南西から)

3　周溝ＥＦライン断面(北から)

図版10

1　石室玄室部(南西から)

2　石室羨道部(北東から)

1　石室玄室羨道間天井石(北東から)

2　石室玄室部東側壁(南西から)

図版12

1　石室羨道部西側壁(北東から)

2　石室羨道部東側壁(北西から)

1　石室内埋土状況(北東から)

2　玄室部床面(南西から)

図版14

1 玄室西奥遺物出土状況（南から）

2 玄室奥遺物出土状況（南西から）

3 玄室東奥遺物出土状況（南西から）

1　墳丘盛土状況(北東から)

2　墳丘盛土状況(北西から)

図版16

1　石室盛土除去後(北東から)

2　石室盛土除去後(北西から)

1　石室盛土除去後(北東から)

2　石室盛土除去後(東から)

図版18

1 墳丘表土除去作業状況（東から）

2 墳丘盛土除去作業状況（西から）

3 盛土除去石室清掃作業状況（北東から）

1

8

2

9

3

4

10

5

11

6

12

出土須恵器

13

15

16

14

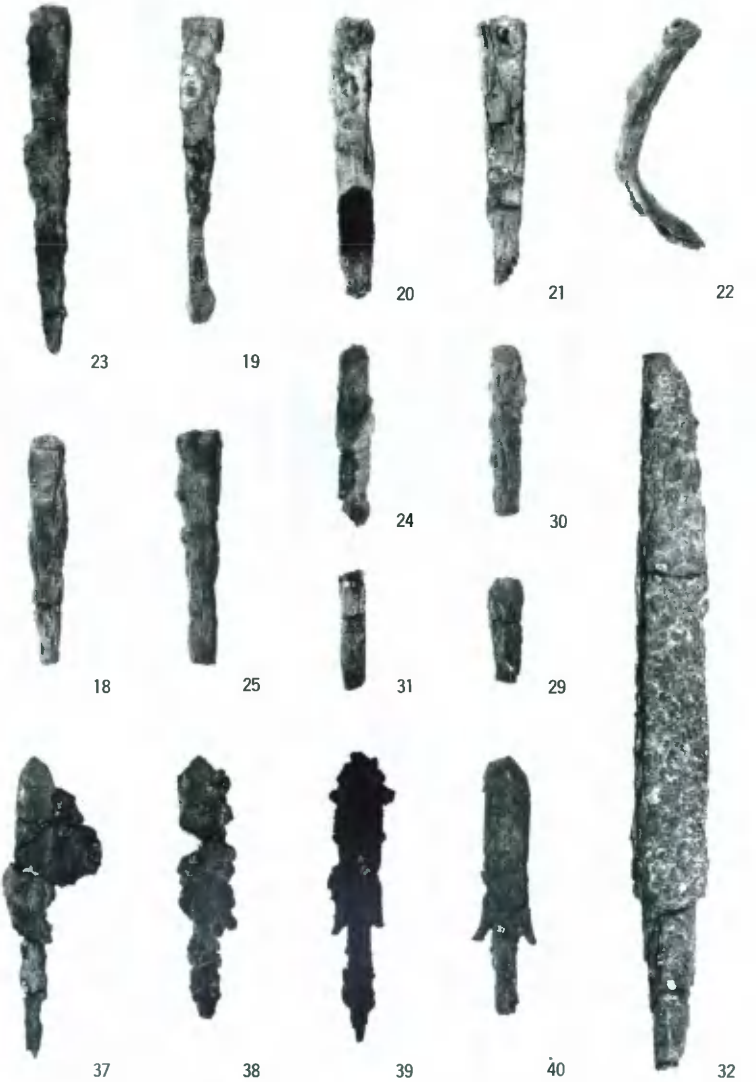
17

90

93

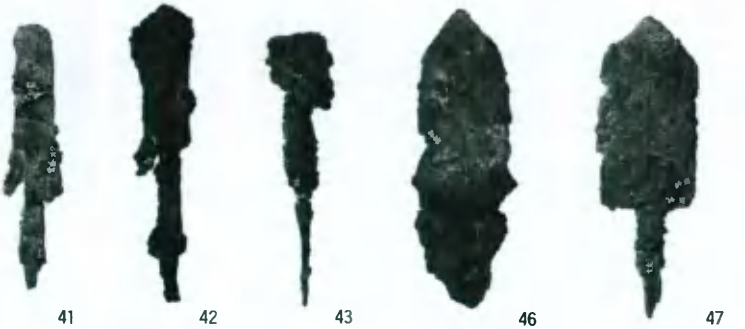
17

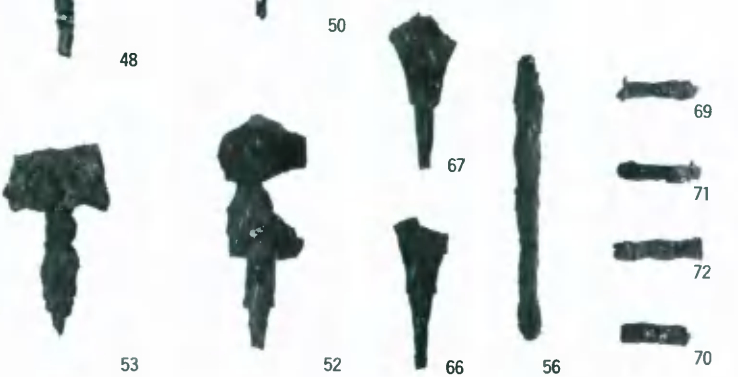
出土須恵器・古代末～中世土器



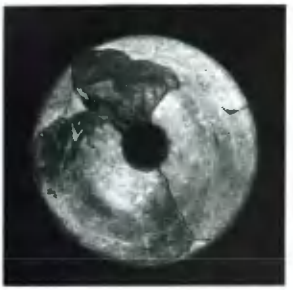
出土鉄器(1)

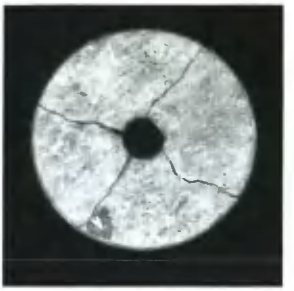
図版22





出土鉄器(2)



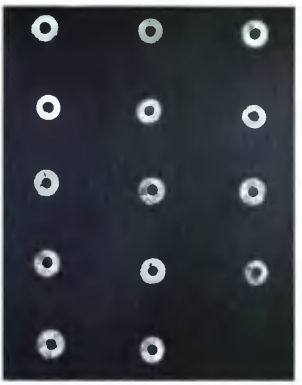


73

96

74

75



76
〜
89

出土遺物

図版24

1　鳩ケ岩山古墳移築復元状況(南西から)

2　龍王塚古墳移築復元状況(南から)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 66

鳩ヶ岩山古墳

昭和63年3月20日印刷
昭和63年3月31日発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　岡山県教育委員会
印刷　岡山県農協印刷株式会社